YNAC 通信

10周年記念特別号

2003.7.1.　NO.17

YNAC10 年のあゆみ

代表取締役　松本　毅

はじめに

YNAC は今年で 10 周年を迎えることができました。

10 年前の 7 月 1 日、自分たちでこつこつと内装を仕上げた事務所で細々とスタートしたあの日に現在の YNAC を想像することはできませんでした。あの時に 3 人が夢見ていた YNAC よりもはるかに大きく成長した今の YNAC があります。これまでに本当に多くの方々と出会い、励ましていただきながらここまでやってくることができました。そして YNAC を応援し、支えてくださったたくさんの方々とのつながりに深く感謝するばかりです。

この 10 年の間に実に色々なことがありました。私個人の生活、YNAC の内部事情、屋久島の環境、日本社会の動き、世界情勢、いろいろなことが絡み合って今の YNAC があります。

小学生だった私の子供たちも今や大学生と高校生、YNAC のスタッフは全部で7名、屋久島のガイドは 100 名ほどになり、日本各地でエコツアーの試みが始まりました。世界ではテロ、イラク戦争、SARS などなど信じがたいでき事が続いています。

しかし、そんな状況の変化の中でも、YNAC は当初掲げた「YNAC 印のエコツアー」を守り続けてきました。思い起こせば、行き詰ったり、悩んだりしながらもいつも前向きであったような気がします。個性の違う3人がいたからこそ三脚の脚のように、どんなでこぼこの地面でもしっかりと安定させることができたのではないでしょうか。そして何より多くの方々の支えがあったからこそ今日を迎えられたのだと思います。

そんな YNAC の 10 年、いやその前から動き出していた YNAC のこれまでの歩みを振り返ってみたいと思います。

YNAC 通信創刊号の表紙写真（1995/1/1）

1．黎明期　87年～93年

そもそもYNACは3人が出会うことから始まった。偶然にも87年4月に小原が、10月に私が半年ほどの違いで屋久島に移住をしていた。その2年後の89年4月、市川が大山隠岐国立公園のレンジャーを経て、霧島屋久国立公園屋久島管理官に赴任してくる。この3人を結びつけたのは市川だった。

環境庁主催で地元の人向けの行事「自然に親しむ集い」を市川が企画した。沢登り、カヌー、スノーケリング、森の自然観察など、今の YNAC の活動の基本となっている部分である。この集いの講師に私や小原が駆り出された。下見調査だといっては安房川の沢登りやリバーカヤック、元浦のスノーケリングなど遊び歩き、安房中学校のそばにあった旧環境庁事務所で反省会と称して屋久島の自然について語り合った。これがYNACの原型を作っていく。この作業は、プログラムの基礎を作り出した。フィールドを視察し、フィールドの特性や素材を収集し、安全管理上の情報を把握する。それを持ち帰っては吟味し、コースの設定、盛り上げ方、安全確保のノウハウなどをプログラム化していった。実施後、参加者のアンケートを元にさらにそのプログラムを練り直していく。この一連の作業を 3 年間繰り返し、精度の高いプログラムが出来上がっていった。

もうひとつの重要な要素は専門的な科学者との調査活動であった。

そのひとつは91年3月から屋久島入りした国立環境研究所酸性雨プロジェクトチームである。当時クローズアップされていた酸性雨の調査を全国規模で開始した国立環境研究所は、佐竹研一さんをチーフとしたプロジェクトチームを屋久島に送り込んできた。当初は、河川のPHの測定をするというお手伝いだったが、佐竹さんはさまざま分野の専門家を引き連れて現地調査に来られ、その際の案内役を我々が引き受けることになった。これはYNAC設立後も継続している。この現地調査ではそれぞれの研究者が専門の視点で屋久島を分析していった。決して過大評価をせず、自然を一つ一つしっかりと見て、そして充分ディスカッションをしながら分析をする。この佐竹さんの科学者としての姿勢に触れさせていただいたことはYNACにとって非常に重要なことだった。特に私のような素人の意見にも充分耳を傾けていただき、真剣に議論をしてくださったことは大きい。

もうひとつの重要な調査活動は、91 年に行なった屋久島沿岸海洋生物調査である。私が屋久島に来た頃、屋久島の海に関する文献を調べようと探してみるが、屋久島は山ばかりが注目されて海に関することがまったく抜け落ちていることに気づいた。ならば自分たちで調べてやろうと、市川、小原、砂川さんらと「屋久島海洋生物研究会」を発足させ(89 年 7 月)、いざサンゴの調査をと春田浜に向かうが、素人にはサンゴの同定すらできないことに気づき愕然とした。91 年に市川が海中公園センターから海洋調査の予算を取ってきて本格的に海洋生物調査に乗り出すのだが、前回挫折したサンゴの調査をどうしようかということになった。そこで、まったく面識のなかった当時熊本大学(現在九州大学)のサンゴの研究者野島哲先生に電話をしたところ快く屋久島調査を引き受けてくださり、いよいよ調査活動が始まった。本格的な海洋調査をしたことのなかった私には刺激的であり、論文の書き方まで指導いただいた。屋久島沿岸海洋生物調査報告書は今も私の宝物のひとつである。しかし、この調査活動で私が得たものは、ペーパーだけではなく、自己の自然観の中にもっと深く影響を与えるものだった。調査は合宿のように自炊をしながら泊り込みで行われた。毎夜三岳を酌み交わしながらの自然談義は果てを知らず、毎日寝不足気味で調査を行っていたが、そのとき野島先生と語り合った自然観は深く私に影響を与えてくれた。

屋久島海洋生物研究会

このように、佐竹さんや野島先生の冷静な科学者の目の奥には悠久の自然のドラマを思い描く深くて広いロマンがあり、そのロマンについて惜しみなく我々と語り合ってくださった。無味乾燥な化学方程式もわくわくするような魔法の呪文のように思えてくる。論文という事実を淡々と綴ったペーパーの裏には、科学者のロマンが綴られている。そんな自然観、世界観に触れさせていただいたことは、私にとって掛け替えの無い宝物となっている。他にも多くの研究者、カメラマンの方などに同行させていただいたことは私たちにとって中身の濃い貴重な経験となった。

このように YNAC の黎明期に美しい朝焼けの感動を覚えたことは今も私自身の確信と自信となって支えてくれているのである。

2. 始動期　93年～95年

92 年 3 月に市川は「退職願」を懐に入れたまま、一旦霞ヶ関へ転勤し、屋久島を離れるが、翌93年3月に環境庁を円満退職し、屋久島へと帰ってくる。いよいよ YNAC 設立へと動き出す。夢と希望に満ちた YANC 設立の最初の仕事は、会社設立のための書類作りであった。司法書士に頼めばすぐに出来上がるものを会社の作り方の本を片手にすべて自分たちで行った。その後も経理、社会保険などの事務関係や事務所の内装までもすべて自分たちでやった。これも自分たちにやれないことはないというYNAC 気質とでも言おうか。

パンフレットの表紙は、当時小原が凝っていた折り紙で作った鹿を貼り付け、コピー機でコピーをしたという手作りそのものであった。私は、この手作りパンフを伊豆で中山千夏に手渡したのだ！

93 年 7 月 1 日に「屋久島エコツアー」を旗印にスタートをした YNAC の初仕事は有隣堂書店のカルチャークラブだった。我々は初仕事を緊張気味にスタートをしたが、和やかな雰囲気の中で無事終了し、評判はよく、追加ツアーも満席になり、手応えをつかんだ。が、しかし、夏が過ぎ、オフシーズンに入っていくと仕事がなく事務所にいる日が多くなってくる。我々は年が越せるのだろうかと不安になってきたころ、突然怒涛のようにマスコミが押し寄せてきた。「世界遺産登録」「自然と共生した新しい観光」と新聞・雑誌・テレビ・ラジオの取材が次々とやってきては、聞きなれない「エコツアー」を取材していった。あちこちに広告を出すほど経済的余裕のない我々にとってこの取材はありがたい宣伝になった。中でも共同通信の記者が実際に YNAC のツアーに参加して書いた体験記事は実に有効だった。記者自身がエコツアーの面白さ、自然のすばらしさを体感し、記事には実に活き活きと YNAC のエコツアーが語られた。その記事がまた次の取材を呼び寄せることになった。

しかし、マスコミにも落とし穴があった。週刊プレーボーイの美人記者が正体を隠して一般の観光客になりすましての潜入レポートの取材に来た。ツアー中に週刊プレーボーイの記者であることを明かしたので、インタビューなどにも応じた。発売日が待ち遠しく本屋に買いに走って手に取った週刊プレーボーイの見出しは、「何やら怪しいエコ・ツアーの正体」とあり、「環境の美名に浮かれて自然破壊するお馬鹿なブームに喝」を入れるという記事。読んでみるとこき下ろすはずの企画がまじめなエコツアー会社にあたってしまい、なんとも中途半端な記事になっていた。マスコミにはこのような記事があり、それを喜ぶ読者がいるということを実感する。我々の抗議に悔い改め、プレーボーイ増刊のTepeeでまじめに「お薦めネイチャーツアーガイド」で紹介してくれた。

しかし、受身ばかりでなく、営業部長の市川は、環境庁時代の人脈を頼って YNAC のエコツアーを紹介し、また、自ら東京を始め、各地の営業活動に出かけた。当然、旅行社はエコツアーなどにはまだ理解がなく、縄文杉日帰りツアーをメニューからはずしたり、定員を 10 名以内などといえば相手にもしてくれない。高いだの、50 人ぐらいで動かせだの、と我々とかみ合わない。しかし、変な妥協はせず、我々の主旨を理解してくれるところとだけ話を進めた。苦しい選択ではあったが、今思えばそれは正しい判断であったと思う。あそこで安易な妥協をしていれば今の YNAC はない。営業努力の甲斐あって JAS や ANA、近畿日本ツーリストなど旅行社との提携の仕事が取れるようになってきた。売り上げも毎年順調に伸び、いよいよ YNAC も軌道に乗って走り出した。

折り紙パンフレット

3.　成長期　96年～99年

YNAC が始動を始め、マスコミの取材や市川の営業が功を奏して何とかやっていけそうなめどが立ってくると YNAC は二つの意味で屋久島の外へと飛び出すようになった。

ひとつは、国内のエコツーリズム業界への進出である。

95 年屋久島観光連絡協議会が催した観光セミナーで当時JTB虎ノ門支店の支店長であった小林英俊さんが屋久島に講演に来られた。あまり興味もなかったが時間があったので覗いてみるとなんと YNAC を紹介した新聞記事を取り上げての話であった。講演の後、小林さんにその新聞記事に出ている YNAC の社長ですと挨拶をするとわざわざ翌日時間を割いていただいて事務所に来てくださった。小林さんは JTB の中でエコツアーを推進しようとしている方だった。YNAC のエコツアーについて色々話をするとやっとエコツアーらしいエコツアーをやっているところに出会ったと大変興味を持っていただいた。小林さんは、後に色々なところで YNAC エコツアーを紹介してくださった。

その結果、私の全国行脚が始まるのである。96 年の日本旅行業協会（JATA）主催のエコツアーシンポジウムに着慣れないスーツを着こんで緊張の中でパネリストを務めた。これを皮切りに、エコツーリズム推進協議会（JES）、日本アウトドアネットワーク（JON）、国土交通省、環境省などのさまざまなシンポジウム、セミナーで事例発表、パネリスト、講演と声がかかるようになった。そこで注目を集めたのは、まず民間でエコツアーの専門会社を立ち上げ、経営が成り立っているということだった。エコツアーが産業として地域を活性化していく可能性を示したのである。

もうひとつの注目点は、「エコツアーは情報産業である」という YNAC の主張であった。これまでエコツアーは、ボランティアによる環境教育の場であるという認識が強かった。そして、エコツアーは儲からないと思われていた。いやむしろ環境教育で儲けることはいかがなものかという空気すらあった。その中で、YNAC はビジネスとしてのエコツアー実践例を示したのである。この頃、全国的に環境教育やエコツーリズムへの取り組みが活発化してきており、色々な会議の場で多くの方々とエコツアーやエコツーリズムについて議論をすることができた。このことは、私自身が漠然と捕らえていたエコツアーというものを整理し、理解することに役立った。そして、YNAC が目指しているエコツアーに自信を持つことができるようになった。これは私にとって大変大きなことであった。

さて二つ目は、YNAC による海外ツアーである。

ある日、小原がボルネオに行きたいと言い出した。屋久島は、「亜熱帯から冷温帯まで」といわれているが、屋久島から冷温帯までは日本列島の自然であるので容易にイメージすることができた。じゃあ亜熱帯、熱帯ってどうなのだろうか？行ったことがないのでイメージができない。屋久島から沖縄・台湾、フィリピン、を見ていくと赤道直下にボルネオがあった。だからボルネオだ！と言う。小原のボルネオ行きは否決された。そして「3人でボルネオに行こう！」が可決された。という訳で 95 年にボルネオのサバ州で初めての海外研修を行ったのである。

そこで学んだことは二つ。世界には圧倒的にスケールの大きな自然があるということ。決して屋久島が見劣りするということではないが、日本一とか世界一とかいう基準では比べられないスケールの大きさと迫力がボルネオにはあった。世界遺産だからということだけで自慢をしていても世界にはもっとすごいところがあるのである。しかし、この認識は、改めて世界から屋久島の自然を見直すことにつながった。また、屋久島の自然をじっくりと見てきた我々の眼には熱帯の自然も屋久島から南につながるアジアの自然としてリアリティーをもって見えた。つまり、屋久島で身に着けた自然観は世界でも通用するということであった。

世界から屋久島を見てみると屋久島から世界が見えてきたのである。

この研修をきっかけに、有隣堂カルチャークラブ（現在は風カルチャークラブ）の主催でボルネオのサバ州・サラワク州、タスマニア、台湾と海外ツアーの企画ガイドを成功させてきた。また個人的には私はドゥマゲッティー（フィリピン）、小原がオレゴン州（アメリカ）、バリへ、市川はタマンネガラ（マレーシア）、そして、今後のツアー化の視察としてタイ、スラウェシ（インドネシア）へとアジアを中心に海外へと活動を広げていくことになる。

この海外へ出て行くことで見えてきた屋久島の存在感は、YNAC を大きく成長させ、厚みのあるものしてきたと思う。

4.　発展期　00年～03年

97年ごろから3人だけでやっていくには限界が見えてきたことから、スタッフの増強を試みるがうまくいかなかった。そこで 99 年 4 月から本格的な研修制度を導入し、スタッフをきちんと育てていくことを始めた。

第一期生として、村形久美子、持原道子、藤村早苗の3人が入り、第二期生として、岡田愛、高橋（旧姓浜崎）宏美の2名、三期目は予定をしていなかったが乗り込んできて自分を売り込んだ鷲尾紀子の1名が研修生として入った。6名全員が研修終了後も YNAC に残り正スタッフを目指したが、現在は村形、持原の2名は退職し、他4名がスタッフとして頑張っている。

スタッフが増えたおかげで私は屋久島内のガイド組織である屋久島ガイド連絡協議会、屋久島観光協会ガイド部会などの活動に力を注ぐことができた。また、全国のエコツーリズムに関するセミナーやシンポジウムなどへ積極的に参加することができるようになった。そして、組織的にも3人でやっていた家内工業的な組織から有限会社としての体をなすようになってきた。設立当時、冗談で言っていた「スタッフを10人ぐらい抱えて左団扇」が少しずつ現実味を帯びてきたのである。しかし、スタッフを抱えれば抱えるほど品質管理の難しさや色々煩雑な雑務が増えてきているのは現実だが。とはいえ、頭脳と手足が増えた分、環境への配慮（環境対策部）、安全の確保（安全管理部）、地元への貢献（自然クラブの運営）、など組織的に取り組むことができるようになった。

他に事業拡大の方向として上五島の手延べうどんと屋久島の名水が生み出した幻の屋久島銘水うどんを使い、YNAC 事務所にてうどん屋の事業を展開する予定である。また、環境対策としてBDF（バイオ・ディーゼル燃料）の導入と事業展開を検討している。これらも地域の産業として定着することを目標としている。何か次々とわくわくするようなアイデアが浮かび、YNAC が単なるツアー会社ではなく、エコツーリズムを実践する企業体へと発展していくことを目指し始めている。これもエコツーリズムが地域おこし、地域間のネットワークとしての概念があることを学ばせていただいたからだと思っている。

おわりに

YNAC を立ち上げようとしたときに何か新しいものに挑戦をするときめきを覚えました。YNAC は 10 年というひとつの節目を迎え、確実に当時思い描いていた夢を形として実現させました。そして、これからの 10 年、私はまた新しいものへの挑戦を始めたいと思っています。今あの 10年前と同じときめきを覚えています。YNAC の更なる発展と新事業の展開をこれまで以上に見守っていただきたいと思います。

ボルネオ研修／キナバル山のローズピークにて
4101m（当時）

YNAC10 周年に寄せて

「森と水のドラマ」

佐竹　研一

遙か彼方から波が寄せてくる。遠くの海に風が吹き、幾重ものうねりとなって荒磯に迫る。それは紺碧の海から雄々しく立ち上がり、白い波頭をたてて激しく岩にぶつかる。砕け散る波、敢然と立ち向かう岩々。遙かなる昔から、屋久島が誕生した時から続いている風と波と岩の相克のドラマ。

六千年の昔、火砕流で屋久島が焼き尽くされた時、そこに古屋久島のラストシーンがあった。そして新しい森の始まりがあった。数千年が経過し、屋久杉の巨木が島を覆った。そして、その伐採が始まった時、神います樹木の無数のラストシーンがあった。苔むす切株の実生のドラマの始まりがあった。私達が見ている今の世界、それは全て過去の歴史を秘めたラストシーン。

屋久島が世界自然遺産に登録されたとき、太平洋の片隅の孤島としての歴史は終わった。そして、数千年の隔絶の森が世界とリンクし新たなドラマが始まった。多くの人々が屋久島に何かを求めてやって来るようになった。島の生態系が耐えきれない人とエネルギーと資源の流れが生れ、島の新たな繁栄と苦悩のドラマが始まった。

私達はどこからやって来てどこに行くのか。人と自然の共生が唱えられ、自然再生が法律となり、人々の心が過去と未来を模索する。原点の自然はどこにあるのか、文明や文化の源となった自然はどこにあるのかと。

人々が大自然の創造を一瞬のうちに破壊し、そして、それを取り戻すには途方もない時間がかかることに気づき始めたとき、屋久島が注目されるようになった。数千年の時間を経た森と水のドラマが、私たちの原点の自然のドラマがそこにあった。

屋久島野外活動総合センターの「Y-NAC 通信」はそのドラマを伝え続ける。シェークスピアも近松もオペラも遠く及ばない大自然のドラマがそこにある。自然はそこにあり私達に語りかけている。自然との出会いを大切にする人々が道案内人となり、その奥深いドラマを伝えてくれる。

国立環境研究所の佐竹さん。
酸性雨の調査というと兎角雨を測ってと思われがちだが、佐竹さんは生態系そのものに目を向けるスケールの大きな研究者。ご一緒させて頂くだけで、いつも目から鱗が落ちることばかり。

「YNAC エコツアーの思い出《登山編》」

若林　つきみ

参加回数が 10 回を越えた御褒美に YNAC10 周年記念の文章を書かせて頂くという栄誉を賜り、我々夫婦が連れて行って貰った登山コースを振り返ってみた。

・「随分詳しいガイドさんだなあ」初めてのエコツアー・黒味岳コースは所謂「山頂を目指す」従来の日帰り登山のイメージを覆すものだった。これを機に毎年 GW の忙しい時期に怪しいコース好きの我儘客に付き合わされることになるとは小原さんも予想しなかっただろうな。('99.4)

・市川さん＋研修生フルエントリーで登ったモッチョム岳は、これまで参加した全コース中で未だに「厳しさ最強」。山頂で突然の大雨に遭い帰りはウォータースライダー化したコースで夫は転びまくりの泥まみれ、麓に着いた時には予定時間を大幅にオーバー。他の参加者が居なかったのが幸いだった。('99.9)

・太忠岳は木や苔を教わりつつのんびり登る事が出来た。巨大な天柱石と並び印象に残るのは、休憩時に小原さんが弁当の唐揚をつまみ食いしていた事。早目のエネルギー補給の重要性を学んだ日であった。('00.5)

「10 周年、めでたい。そして、ありがとう。」

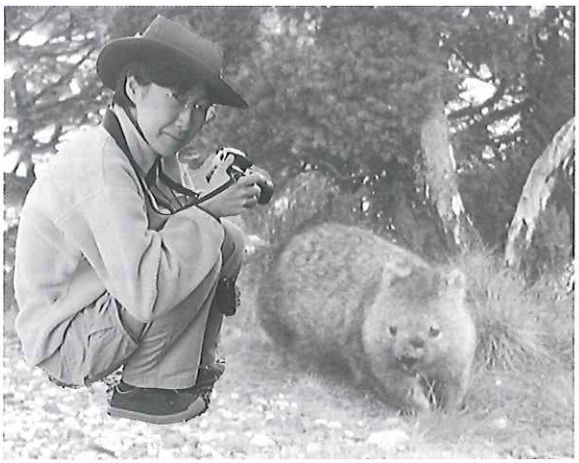
土橋　珠美

見事なまでの大活躍の 10 年間。10 周年、おめでとうございます。

カルチャークラブとして窓口役になり参加者を募集し、Y-NAC さんにガイド頂くという仕事でのお付合いは、きしくも Y-NAC さんの立ち上げと同時に始まり、お付合いも 10 年となりました。そして、唆され唆し、ボルネオ・台湾・タスマニアと海外も催行しました。「世間知らずの無謀さ」と松本さんにからかわれた真にその通りで、引きずられるまま、上り坂を駈け上がった 10 年でした。未だ世間は分かりませんが、「この森はいいネ」というツーの言葉が吐けるようになり、本当に収穫の多い 10 年でした。

当初、つまり 10 年前。新卒ホヤホヤの私は「手が空いている」という理由で屋久島担当となり、言葉よりも冷や汗の多い拙すぎる説明でガイドさんを探して泣く泣くあちこち電話した日が思い出されます。挙句の果てには、屋久島に土地を買わないかという電話が入る始末。そんな中、この拙い説明を最後まで辛抱強く聞き、「こういうことでしょう」と温かく行間を掴んで下さった小原さんとの出会いは衝撃的でした。「神様は居

風カルチャークラブの土橋さん。有隣堂時代から誰もが認めるカルチャークラブの大黒柱であり、看板娘。



た！」でした。ほぼその頃、私達の小さな事務所にわざわざ営業に足を運んで下さった市川さんの姿がありました。帰り際、疲れたサラリーマンの多い駅のホームで、体を 90 度折り曲げて、気合いのこもった挨拶してかれた市川さんの営業ぶりが今も目に焼き付いています。そしてほぼ 10 年、進路に悩む私に、「仕事は自己表現ですよ」とそっと背中を押して下さった松本さん。大きすぎる一言でした。

森や海はもちろん、人生までも教えて下さった。私にとっては宝物であり、人生の指針であり、温かく見守って下さるお兄ちゃん達のような Y-NAC さんです。お兄ちゃん達、体に気をつけて、「とも白髪」で宜しくネ。

そう、最強のリピーター若林夫妻です。

・幻想的な花山歩道はヒルと戯れ市川さんの動物好きを再認識するコースでもあった。下りが苦手な夫に後ろからずんずんとプレッシャーを掛ける愛ちゃんは、この頃から既に貫禄を備えていたような。('00,10)

・植生の垂直分布を見つつ温泉へ下る尾之間歩道、乗越から蛇之口滝分岐迄が意外と長く、最後の照葉樹林帯は大急ぎ。鯛之川渡しは前日の雨で増水気味、我々の荷物を引き受けた市川さんは大変だったね。('02,4)

・1000m 登りが続く愛子岳、案内板の表示高度を批評する内に高度を稼ぐ。山頂の眺めは絶景、前岳登山は少し雪が有る位が快適だ。下りは小杉谷への昔の道で雪に埋もれ目印も少ない。同行したサナちゃんに小原さん曰く「1 度行った所はガイド出来ないといけない」。次回から1人でガイド出来るのかな。('03.2)

・最強記録更新を予想した七五岳は小原さんのショートカット技で意外と無理なく登り、山頂からの展望を楽しめた。色々な目印が混じる怪しいコースはガイドさん無しでは行かれないな。('03.4)

次回は「史上最強」破沙岳目指して体力強化に励むとしようか。YNAC スタッフの皆様には現在の繁栄に甘んじることなく今後ともリピーター向けお勧めコースの開拓を宜しくお願いしまっす。

YNAC10年史

市川　聡

YNAC10周年を迎え、その誕生からの足取りを年表にまとめた。まだ客の少ない頃、たまに来るお客様を奪い合っていた日が懐かしい。妙に初期の頃のお客様のことを思い出すのは年のせいか？ともあれ激動の10年史、一緒に振りかえって下さい。

1987年 4月	小原、屋久島へ移住、平野に住む。岳南（屋久杉工芸）に勤務。安房川下部を初遡行するなど屋久島での山岳活動を開始。
10月	松本、屋久島へ移住、長峰に住む。
1988年 4月	小原、山岳ガイドを始める。
6月	屋久島産文研総会で松本と小原が出会う。
7月	松本の「ワンダーランドダイバーズ」オープン。
1989年 4月	市川、環境庁レンジャーとして霧島屋久国立公園管理官事務所に赴任。小原、砂川さんが宮之浦港に出迎える。
5月	市川、砂川さんと志戸子のスノーケリングに行き、目からウロコが落ちる。海の美しさに感動！
6月	市川、ワンダーランドに来店し、松本に「自然に親しむ集い」の講師を依頼。
7月	小原らが中心となり、屋久島ガイド協会設立。YNACメンバーが中心となり、屋久島海洋生物研究会（以下海生研）発足。
10月	第2回フォト・デュ・ポアソンで海生研が全国優勝。屋久島が日本一魚種が豊富と新聞に載り、島で話題となる。以後大会3連覇。
1990年 1月	市川、淀川小屋に泊まり山スキーに挑戦するも少雪のため敗退。屋久島で山スキーの夢を捨てる。
6月	小原、市川、松本で安房川下部を遡行。これがYNACの原型となる。パンフの表紙写真はこの時のもの。
1991年 3月	国立環境研究所酸性雨プロジェクトチーム（佐竹さん他）来島。島内での観測・調査に対し市川を中心に協力（継続中）。
4月	小原、平野から栗生に移る。
6月	北海道自然ウォッチングセンターのツアーを迎え、初の屋久島エコツアーを実施。これが後のYNACエコツアーのプロトタイプとなる。
9月	屋久島沿岸海洋生物調査（一次調査）。
11月	屋久島沿岸海洋生物調査（二次調査）。
1992年 3月	「屋久島海洋生物学術調査報告書」まとまる。旧YNAC事務所での、徹夜の作業が懐かしい。
4月	市川、霞ヶ関へ転勤になる。
7月	海生研の企画により屋久杉自然館特別展「屋久島の海」開催。
8～9月	小原、ギアナ高地のネブリナ峰踏査隊員としてアマゾンへ行き登頂に成功。
12月	市川、西表島を縦走。仲間川をカヌーで下る。
1993年 1月	市川、三宅島でダイビング。YNAC事務所にあるイルカの頭骨はこの時拾ったおみやげ。
4月	市川、環境庁を退職。屋久島へ復帰。 海生研、栗生タイドプール調査開始（屋久町委託）。 ヤクスギランドの協力金徴収が始まる。これがきっかけとなり白谷や田舎浜など各地に協力金徴収の動きが広まる。次は千尋滝か???
5月	YNAC設立準備会（社名がなかなか決まらず難
6月	YNACとして活動開始店舗改装第一期工事。
7/1	YNAC（有限会社屋久島野外活動総合センター）設立。
7/2	有隣堂カルチャークラブツアー（会社としての初仕事となる）。 市川、中馬さん、福永さんらと第1回加計呂麻シーカヤックマラソンに参加。 河東田晴香（屋久島高校）アルバイト。
8月	松田千鶴（奈良大学）アルバイト。
9月	超大型台風13号猛威をふるう。いまだにこの爪痕が色濃く残っている。
10月	店舗改装第二期工事。 シーカヤックを3艇導入。市川・松本、九十九島シーカヤックツアー（実は飲ん方）を楽しむ。
11月	市川、東京営業の旅。JASナイスウイングとは、この時からのつきあい。他にも近ツリ、JTB、日本旅行、阪急旅行社等をまわる。
12月	屋久島が世界自然遺産地域に登録される。
1994年 1月	安房林道でクロカンスキーを楽しむ。冬場のクロカンツアーの可能性を探るも、年々暖冬となりツアー化実現せず。

YNAC黎明期

YNACの種は、小原の移住から移住から始まった。そのすぐ後に松本が移住し、最後に市川が赴任。

小原は山岳ガイド、松本はダイビングガイドとして働いていた。

市川が環境庁で始めた「自然に親しむ集い」（現在も続いている。）の講師を2人に依頼したところから、3人の活動が始まる。

その中で、山や海を別々に扱うのではなく、トータルにコーディネートし、海・山・川と3拍子揃った屋久島の魅力を伝えていこうということで、YNACの構想がはじまった。

いい加減な大会で、4回目で自然消滅してしまったが、屋久島の海の魅力を客観的に伝えるよい機会となった。以後様々な場面で「屋久島の海は魚種数日本一」と語られるようになった。

熊本大学の野島先生と栗生沿岸の海洋生物調査を行った。小原家の裏の空家に泊まり込み、砂川さんがカニ篭で獲った大ガザミや釣ってきたスズキを皆で食べたのが懐かしい。

この時塚崎のタイドプールの素晴らしさを野島先生に教えられ、タイドプール水族館が構想された。これが93年の調査につながり、95年には屋久町により塚崎タイドプール水族館が開設されるに至る。

またこの時の調査結果を基に2002年2月には、栗生の沿岸が海中公園地区に指定された。

数々の華麗なるバイト歴を誇る松本は、大工仕事は基本的に自分でやるという主義。旧事務所及び現事務所とも、内装は全てYNACメンバーの手作り。旧事務所では天井が波打っていたのを、拾ってきた漁網を張ってごまかしたりしていたが、その後技術の進歩を今の事務所に感じて頂けるであろうか。

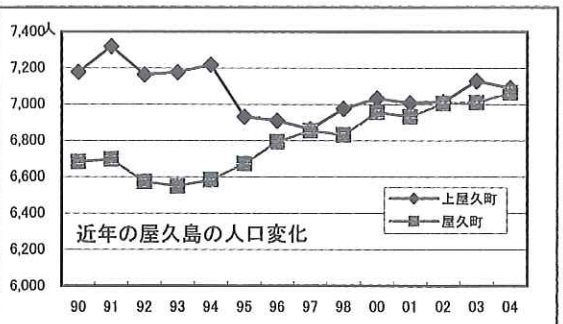
ただ最近は時間がなくて、大工仕事もままならない。

土橋さんとはこの時からのお付き合い。

初めてのツアーは、麦生の自然保護協会施設を借り切っての、宿泊、バーベキュー付きであった。この時から常連となって下さったお客様も多い。現在、有隣堂から風カルチャークラブに発展！年4回程度のペースでツアーが実施されている。

YNACが企画ガイドする海外ツアーも全てカルチャークラブ主催。

	7月	鈴木信子(ノブ、武蔵大学)アルバイト。
	8月	太細(マジック、道都大学)アルバイト。
	9月	屋久島シーカヤックスキッパーズクラブ(中馬俊夫、寺田吉夫、砂川聡、YNAC3名)、シーカヤックで種子屋久海峡横断に成功。
1995年	1/1	YNAC通信創刊。現在に至る。
	1/17	阪神大震災。松本、神戸へ両親・兄の救済に飛ぶ。
	2/5	屋久町雪祭り。市川、スキーの指導にあたる。
	2/9～20	YNACボルネオ研修。
	5/19	松本、屋久島高校スライド講演会。「屋久島の海」
	6/7～9	YNAC、国立環境研究所、「自然生態学セミナー」で講演。
	7/12～14	小原、屋久島高校学校登山にアドバイザーとして参加。
	7/13～8/25	和田和子アルバイト。
	7/26～30	東京のドゥスポーツ植野氏、ダイビング業界初のエコツアーを屋久島で催行。(97年まで)
	8・9月	怒涛の夏。(松本の22日連続ガイドを筆頭に、市川14日連続、小原12日連続)
	10/5～	東洋工学専門学院屋久島実習(レインジャー養成)。YNACは沢登りとスノーケリングの講師を勤める。(継続中)
	10/22	屋久島いわさきホテルオープン。島内外の交通機関を握るいわさきグループの高級リゾートが尾之間にでき、屋久島の交通体系にも変化が。最上階レストランから見下ろす照葉樹林の新緑がすばらしい。
	11/15	小原、白谷雲水峡の蘚苔類調査開始。
	11/25～	市川、環境教育フォーラムにゲスト出席(清里)。
	11/27～30	松本、和歌山県立自然博物館のソフトコーラル調査に協力。
1996年	1/22	小原、箱根の函南原生林視察
	2/14～22	松本、小原、ボルネオのムル国立公園で研修。他に滝田よしひろ、中島麻裕が参加。ロングボートの転覆で、滝田氏死にかける。
	2/22～28	有隣堂カルチャークラブ「熱帯雨林・ボルネオを往く」催行。松本、小原が講師をつとめる。
	3月	縄文杉に展望デッキ完成。縄文杉に触れることができなくなる。
	3/1	松本、日本旅行業協会(JATA)主催のエコツアーシンポジウムにパネリストとして参加。
	3/5	市川、北海道開発局主催のエコツアーシンポジウムで、基調講演。
	4月頃	安房に早朝弁当「ひまわり亭」オープン。
	4/6	渡辺かな子、研修生としてYNAC入り。
	4/13	屋久島世界遺産センターオープン。
	4/21	地元向けに「安房川カヌー体験会」を主催。
	5/11～15	市川、JATAの格安エコツアー研修でマレーシア・タマンネガラ国立公園へ。
	5/20～22	屋久島でJATAエコツアー研修。YNACがガイドをつとめる。
	6/17～29	小原、オレゴン州で研修兼家族旅行。
	7/10	市川、屋久町春牧の新居に移る。
	7/19	台風6号屋久島を直撃、森に大被害。西部林道、土石流で不通に。
	7/20	環境文化村センター、環境文化研修センターオープン。県の環境文化村構想の具体化施設が誕生。箱が立派なのは鹿児島県らしいが未だにプロパーの職員がいない。
	8/1	松本、屋久島環境文化村センター職員研修の講師をつとめる。
	9月上旬	松本・市川・渡辺、水中写真家中村宏治さんの取材サポート(ニュース23「中村宏治のちょっと底まで」)
	9/29	台風21号北東の強風と共に4日間で1800ミリという恐るべき雨を降らせ、白谷林道土石流で不通に。(11/28まで)
	10/3	安房にYNACカヌー艇庫完成。
	10/21～22	小原、国際シンポジウム「世界の常緑温潤林生態系と人との共生」参加
	11/15	松本邸、小瀬田に完成。
	11/27	松本、屋久町岳南中の文化祭でスライド講演。
	12/9	市川、神戸・大阪・名古屋へ営業の旅。関西方面への営業はこの後も何度か試みるが実を結ばず。
	12/9～15	小原、台湾の森を見に行く。
1997年	1/18	松本、屋久町PTA海のスライド講演会。
	1/31～2/2	松本、「『自然が先生』全国市民の集い」でパネラーを勤める。
	2/12	市川、小瀬田小PTA 家庭教育学級でヤクシカについて講演。
	2/15	松本、安房小学校スライド映写会。



過疎が止まった！

1960年頃をピークに減り続けた人口が屋久町では93年に増に転じ、97年にはついに上屋久町に追いついた。平内近辺にIターン者が多数移住したのが増につながったようだ。上屋久町は土地が得にくいということもあり人口が減り続けたが、97年には増に転じ、現在両町とも微増を続けている。

この時のボルネオの印象は強烈。信じ難いスケールのキナバル、熱帯雨林に聳えるメンガリスやゾウの足跡。パラダイスのようなシパダンの海。これ以後YNACの積極的な海外ツアーが始まる。これまでボルネオ、台湾、タスマニアで企画ガイド。今後スラウェシ、バリ、マダガスカル等の企画を考えいる。

現在YNACのダイビング部門でガイドをしている高橋宏美は、この専門学校の卒業生。かつて勤めた河東田晴香も。

他にも環境文化研修センターのインストラクターなど、屋久島で活躍中の卒業生も多い。

YNACも縄文杉には特別の想いがある。

日帰りの縄文杉ガイドがお客様の主要ニーズであった時代、縄文杉へは参りませんということを、コンセプトにYNACを立ち上げた。当初は縄文杉へ案内して欲しいという問い合わせばかりであったが、なんとかなだめすかして、白谷やカヌーに誘い込むのが、電話応対のテクニックだった。

今でも縄文杉人気は衰えを知らないが、一方で屋久島の情報が広く伝わるようになり、白谷や西部などかつては考えもしなかったところへの予約が引きも切らなくなった。

もののけ姫の森などむずがゆくなるようなキャッチフレーズが一人歩きしたりしているが、屋久島の自然が縄文杉一辺倒ではなく、脚光を浴びるようになったのは喜ばしい。

弁当屋盛衰

YNACにとって弁当屋は、重要な仕入先。「コスモ」の弁当は、朝8時頃から品数が揃っており、最もお世話になった。晩年は月曜日の詰め放題バイキングを松本が愛用していたが、2001年8月に閉店したのは本当に残念で不便となった。

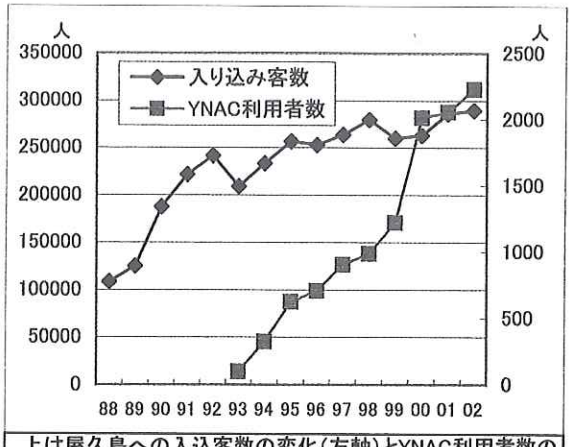
また栗生へのダイビングの時などによく利用した、尾之間の「マルシン」も96年に閉店。

一方登山など早朝に出発する場合は、宿屋に弁当を頼む必要があった。宿に弁当を頼んだら、おにぎりとタクワンしかなくがっかりした事も(松本談)。そこに早朝弁当を扱う画期的な弁当屋「ひまわり亭」が現れた。バスケットタイプのおにぎり弁当が好きでよく利用したが、その後早朝弁当屋が次々と誕生し、残念ながら99年でパイオニアの幕を閉じた。

かわってその頃からよく利用されるようになったのが、ゲットウの葉っぱで包んだおにぎり弁当を売り出した「あさひ弁当」。この葉っぱ包み弁当がお客様に好評で、現在も非常にお世話になっている。

安房川のオオウナギ

	2/20～28	松本・市川、サラワク研修。前年ボートの転覆で果たせなかったピナクルズへ。
	2/24～3/8	小原、有隣堂ボルネオツアー（サバ編）講師。
	3/1～3	市川、久住環境教育ミーティングにゲスト出演。
	4/27	河東田晴香入社。
	5/3	YNACホームページの開設。この時期はYahooで「屋久島」を検索しても10件ほどしかヒットしなかった。今やアクセス数も30万件を超えYNAC集客の中心的存在となった。
	5/25	YNAC主催の地元向け「カヌーに親しむ集い」安房川にて開催。
	6/30～7/6	市川、知床水鳥営巣地・ヒグマセンサスに参加。シーカヤックで知床半島一周（ヒグマ6頭目撃）。
	7～9月	前田央輝、YNAC研修生。
	7/1	徳州会病院開業。島民悲願の総合病院がついに実現。医師数は十分ではないが、皆一安心した。
	7/12	映画「もののけ姫」全国封切。シシガミの森を求めて、屋久島詣でが相次ぐ。もののけ姫ブームの到来。
	10/12	松本、NHKBS生中継「屋久島」に出演。
	10/16～17	松本、阿蘇で行われたJONミーティングに参加。
	11/9	小原、久方振りに霧島へゆき、YNACの視点で森を楽しむ。
	12月	松本、「観光地作りの実践」（屋久島におけるエコツーリズムの現状）を共著執筆。
	12/1～5	松本、ITDSの研修で八丈島へ。
	12/12	小原、筑波大の特別講義「屋久島人と自然、自然環境の解読」で「屋久島のエコツーリズム」を担当
1998年	12/27～1/3	小原、有隣堂台湾エコツアー講師。
	1/8～14	市川、西日本研修の旅。千刈ミーティング出席、秋吉台博物館で洞窟生態学の研修等。
	2/17～19	北海道庁の屋久島視察団受け入れ。この時萬来軒で、道の方たちが長野オリンピックの原田のジャンプを涙ながらに見ていたのが印象的。
	2/20～28	市川、有隣堂ボルネオ（サラワク編）ツアー講師。
	3/6～11	小原、熊野で研修、那智、大塔川流域、果無山脈などの原生林を見て歩く。
	3/9	雲仙観光協会のエコツアー視察受け入れ。その積極的な姿勢に感銘を受けた。
	3/3～14	松本、酸性雨調査受託業務の一環として、日本海側離島（対馬・隠岐・佐渡）の海水サンプリング。
	3/23～29	松本、エコツーリズム推進協議会設立記念シンポジウム(沖縄)で、屋久島のエコツアーについて基調報告。
	6/22・23	松本、（財）日本国際観光開発研究センター総合観光セミナー研修旅行講師。
	6/25・26	松本、文部省野外教育全国フォーラムで事例発
	6/30	YNACめでたく新事務所へ移転。
	7/20～	ハワイ・フォレスト＆トレール社のエコツアーガイドマサ（新谷雅徳）がYNACで研修。
	8/4～7	市川、「全国ナチュラリストのつどい」（立山）でパネリスト。
	9/1	下田和子、アルバイト。楽しすぎて1ヶ月延長して12月までYNAC事務所の裏で過ごす。
	9/2	河東田晴香退社。マサ研修終了。ハワイ島エコツアーの可能性？
	9/14	市川「屋久島の自然地域における保護と利用のあり方検討会」の検討委員に。
	10/12	小原、口永良部島金岳小学校の体験学習でカヌー講習。
	10/29	小原、大阪府三島高校修学旅行のエコツアーを担当。はじめての修学旅行受入。
	11/25・26	屋久島シーカヤック・スキッパーズ・クラブ種子島遠征。少々波があったものの熊野海岸、竹崎海岸など素晴らしいロケーションを楽しむ。YNAC4人全員参加。
	12/5	小原、伊豆の天城山の森へ。バリ島ツアーの可能性を見いだす。
	12/10	屋久島ガイド協会の肝煎りにより、初めて島内ガイド関係者の集まりがもたれた。つまり忘年会です。永田にて。
1999年	1/23	屋久島ガイド連絡協議会発起人会。
	2/5～8	市川、綾町のシンポジウムにプレゼンテーターとして出席。
	2/19～3/1	松本・市川、有隣堂ボルネオツアー（サバ編）講師。
	3/3	小原、栗生小学校開校記念日で、全校児童45人と先生方を前に講演。
	3/17	本格的な研修制度を開始。第1期生・村形久美子が研修開始。
	4/1	小原、栗生から宮之浦へ引越し。



上は屋久島への入込客数の変化（左軸）とYNAC利用者数の変化（右軸）をまとめたものである。なお入込客数のうち約58%が観光客と推定されており、残りはビジネス客や島民の移動とされている。

屋久島への入込客数は、89年のジェットホイルの就航に伴い飛躍的に増えたが、92年以降は増減しつつ全体としては微増で、言われているように93年に世界遺産になって観光客が大幅に増えたというような状況ではない。93年、99年の落ち込みは、台風による夏場の悪天候によるもので、天候に左右される島の観光の実態を良く顕わしている。

入り込み客数の微増に比べてYNACの利用客の伸びの方が急である。一方でここ数年YNACのようなエコツアー業者も急増しており、明らかに入り込み客の中で、エコツアーのサービスを利用する人の割合が高まっているといえるであろう。

YNACの登場で始まった屋久島のエコツアーが、いまや観光協会内でガイド部会が設立されるほど、一つの業界として成長してきたのである。

00年にYNAC利用者数が急増したのは、研修1期生がスタッフとして独り立ちを始めたから。

これまで実に北は北海道から南は沖縄まで、また足を伸ばして隣国韓国まで、先進事例として呼んでいただき、屋久島のエコツーリズムについて講演してまわった。特にこの協議会設立以降、松本がエコツーリズムの伝道師として全国を飛び回っている。

クラブ代表の中馬さんには、親しくしていただき、シーカヤックのみならず、公私ともどもお世話になった。00年に亡くなられたのは、痛恨の極み。

右端が中馬さん（種子島にて）

	4/6	持原道子、研修開始。
	4/14	屋久島ガイド連絡協議会設立総会。YNAC松本が会長に選出される(現在2期目)。
	4/30	相田英明，アルバイト開始。
	5/20・21	松本、全国地域学フォーラムin伊東「エコツーリズムとグリーンツーリズム」で事例発表。
	5/22	松本、真鶴半島を探索。
	6/3～7	小原，有隣堂大台ケ原ツアーに参加。太平洋ブナ林に感動。そのあとで寄った春日山照葉樹林にも
	6/9	藤村早苗，研修開始
	6/29	ガイド連協臨時総会。この日は屋久島に伝わる『山の神祭り』で、山仕事は休むしきたりがある。
	6/30～7/6	市川、西表エコツアー研修。
	7/13・14	松本、栗生での海中公園調査に参加。
	7/22	小原、京大を中心とする屋久島セミナーで、ちょっと講師。
	7/26～8/5	台風5号から8号まで4連発で屋久島付近を通過。
	10/25～28	小原、霧島研修。
	11/11・12	兵庫県立高等養護学校、修学旅行受け入れ。
	11/24・25	YNAC口永良部研修。
	11/28	小原、環境庁自然に親しむ集い講師(西部林道)。
	12/8	YNAC自然クラブ2000設立。地元の自然好きなメンバーを募って月1回のペースで山や川へ。(継続
	12/13～19	松本、タンク耐圧・塗装に長崎・福岡へ。
	12/23～30	小原、パリへ。
2000年	1/19～24	松本、ドゥマゲッティ(フィリピン)へ。
	1/26～30	YNACメンバー、屋久島で行われた国際インタープリター研修会に参加。
	2/18～27	市川、有隣堂ボルネオツアー(サラワク編)講師。
	2/26	松本・村形・持原、日赤救急法講習受講(ガイド連絡協議会主催)
	3/6～19	持原、NHK生き物地球紀行の撮影バイトで馬毛島
	3/12・13	松本、国立民族学博物館エコツーリズム研究会で事例発表
	3/22・23	松本、自然体験活動指導者青年ミーティング「おやじたちが、自然を語る、職を語る、若者と語り合う」で若者達と語る。
	3/24～4/5	市川家結婚15周年記念でタスマニアへ家族旅行。
	4/1	第2期生、浜崎宏美・岡田愛、研修開始。
	5/14	市川・持原・白浜裕樹(シゲル自動車)第一回宮之浦川チューブラフティング調査。
	5/18	YNACホームページのアクセス数、100,000件を突
	7/7～9	松本、シンポジウム「21世紀への展望－歩く旅を考える」でパネラーをつとめる。
	7/18	韓国エコツーリズム調査団受け入れ。
	9/24	小原、環境庁自然に親しむ集い講師(淀川沢登
	10/23～28	市川、 巨木を語ろう全国フォーラムのパネラーとして対馬へ(事前に市川・岡田対馬研修)。
	10/26～30	小原・村形・藤村・持原・浜崎、霧島研修
	11/1	ショッピングプラザわいわいらんどオープン。これまでにないスーパーらしいスーパーができ、ちょっと感動。一方でこれまでYNACが最も良く利用していたコスモが閉店。複雑な心境である。
	11/17～21	松本、清里フォーラム参加。
	12/10	市川、鹿児島シーカヤッククラブ主催の錦江湾再発見の旅に参加し桜島周辺を漕ぐ。
	12月～3月	松本、国土交通省「インタープリテーションプログラムによる地域の誘客戦略づくりに関する調査」委員会参加。
	12/12	松本、東京大学国際開発農学フォーラムで講義。
	12/16	小原、屋久島高校で授業「屋久島の地質と自然」。
	12/21～30	小原、台湾東面中央の富源渓へ、7泊8日の沢登
2001年	1/27～2/5	市川、風の大空・第1回タスマニアツアー講師(岡田愛、参加)
	3/10～12	松本、伊豆安良里で「海辺の環境教育フォーラム」海のエコツアー事例発表(浜崎、参加)
	3/10～12	小原 レスキュー3講習を受講しロープレスキューの国際資格を取得。
	3/14～16	松本、妙高で「自然体験活動指導者青年ミーティング」講師。
	3/17・18	松本、国立民族博物館主催「島嶼における自立的観光研究会」事例発表。
	3/31	村形久美子退社。
	4/16～19	市川・岡田愛、シーカヤックにて馬毛島調査。
	4/23	第3期生 鷲尾紀子、研修開始。
	5/14	藤村、マウンテンバイク初ツアー。
	5/22	松本、屋久島観光協会総会において理事に選出される。
	5/28	市川、長崎県自然保護担当者会議でエコツアーについて講演。

この年、6月から8月下旬まで毎日雨。特に7月下旬は連日、200mmから300mmの雨と予報されていた。1年間の降雨量は6,294mm。おかげさまで測候所の公式記録でも尾鷲を抜いて1位に。名実ともに屋久島が日本一雨の多い所となった。ちなみに淀川登山口では11,718mmもの雨がふった。

あの人は今：YNACを彩った人々

河東田(旧姓)晴香：屋久高生の時、YNACで初めての夏期バイトを務めた。その後東洋工学に進み、YNACに就職するも、1年半で退社。現在1児の母に。長峰にいます。

松田(旧姓)千鶴：卒論の研究で屋久島に来て夏期バイト。史上初めて屋久島で登山者数調査を実施したのがこの人。現在結婚して横浜にいます。

鈴木(旧姓)信子：JONで松本と出会い夏期バイト。しばらく地域おこしのコンサルをしていたが、現在結婚して沖縄に。

太細(マジック)：大学の卒業作品の写真を撮りに来て夏期バイト。台風の撮影に行き、車がボコボコになったのは有名。卒業後屋久島に移住して藤村自動車で働いている。

和田和子：ボランティアで屋久島に来ていて、その後夏期バイト。今は小原がかつて住んだ埼玉県戸田市にいます。

渡部(旧姓)かな子：研修生としてYNAC入り。その後永田の幼児学級の先生等を経て、現在1児の母。安房にいます。

前田央輝：研修生としてYNACに出入り。ネイティブビジョンでのガイドを経て、現在鹿児島市でアウトドアショップ経営。

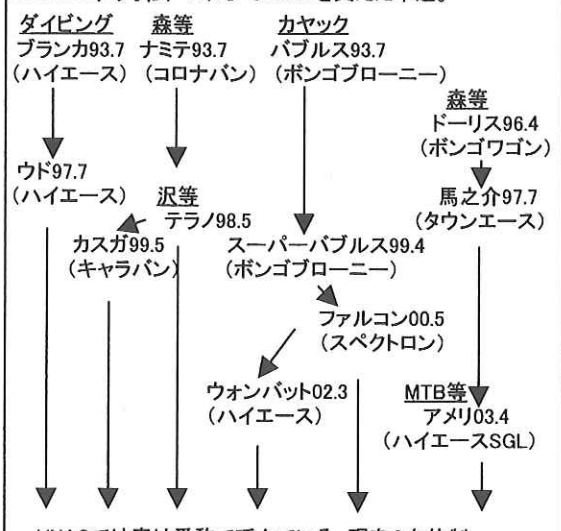
新谷(マサ)：ハワイ・フォレスト＆トレール社のエコツアーガイドをやっていたが、ビザの関係で一時帰国中にYNACで研修。その後就労ビザが得られず、移住を断念。現在、ホールアースで水を得た魚のごとく働いている。

下田(旧姓)和子：4月にYNACのツアーに参加したのがきっかけで秋バイト。なんとその間来たお客様と結婚して、1児の母。

相田英明：奥様を置いて単身YNACで1シーズンバイト。研修生の兄貴分として慕われる。現在栃木県真岡市の根本山自然観察センターで職を得て落ち着いた。1児のパパに。

村形久美子：第1期研修生として初めて正ガイドになったが、1年で退社。パートナーを得て、しばらく口永良部島に住んでいたが、2人で放浪の旅に。

YNAC車列伝 これまでYNACを支えた車達。



YNACでは車は愛称で呼んでいる。現在6台体制。
最近の車は窓が開かないなど、車探しには苦労する。

	6/22・23	小原・持原・鷲尾、口永良部島マルバサツキ開花調査。
	6/22～27	岡田愛、秋の有隣堂対馬ツアーに向け現地調査。
	6/24	小原、環境省自然に親しむ集い「落ノ滝」講師。
	7～9月	鷲尾 「山のトイレさわやか運動」水質調査に参加。縄文杉登山道沿線の水場の調査を実施。
	8月	田口ランディ「ひかりのあめふる島」文庫版発売。松本が自伝的解説を書く。
	9/11	アメリカ世界貿易センタービル崩壊。以後テロ景
	9/19	松本、EXPOなんでもアリーナ　月いちフォーラム講演「屋久島にみるエコツーリズム」:名古屋
	9/19～24	浜崎　JUDFのダイビングインストラクター講習に参加。
	9/27	市川、環境省中央環境審議会自然公園部会現地視察のガイド。
	10/11～14	宮内庁生物学御研究所ハゼ調査に協力。(継続
	10/19・20	松本、環境省主催「トキを軸にした島づくり」パネリスト:佐渡
	10/21・22	JICA自然公園の管理・運営と利用(エコツアー)研修の受入(ベトナムより参加者)。
	10/27	松本、「奥大井・南アルプスマウンテンパーク構想エコツーリズム研究会」講師:静岡
	11/1	ガイ連協フィールド清掃に参加(山の神祭り)。
	11/3・4	小原、海外遡行同人総会参加:白山。
	11/9～11	浜崎、スキューバC級指導員文部省認定試験合格、JUDFダイビングインストラクターの資格を獲得。
	11/13	長崎県上五島広域観光協会エコツアー視察受入。これをきっかけに上五島とのお付き合いが始まる。屋久島銘水うどんの誕生へ。
	11/16・17	福井県海浜自然センターエコツアー研修受入
	12/31	年越し益救神太鼓に岡田・鷲尾デビュー。
2002年	1～5月	市川、屋久島一般廃棄物処理施設検討委員会委
	1/6～27	藤村・岡田、ニュージーランド研修。
	1/19	松本、屋久島高校で「自然ガイドという仕事について」講義。
	1/31～2/2	松本他4名、上五島エコツアー調査。
	2/16～24	市川、風の大空・第2回タスマニアツアー講師
	2/23・24	松本他4名、アマチュア無線講習会を受講し免許取得。
	3月	国有林の伐採班が解散し、ついに屋久杉原生林の伐採が終了。
	3/3	松本、地球環境市民大学で「屋久島の海洋生物」スライド講義。
	3/4～12	松本・市川、インドネシア・スラウェシ島エコツアー下見。
	3/10	小原、自然に親しむ集い・西部林道講師。
	3/14・15	松本、高知フィールドミュージアム推進事業はた・エコツーリズム・セミナー」にて講演。
	4/16～20	松本、韓国のエコツーリズムフォーラムでパネリス
	4/17～22	小原、キャニオニングガイド講習会受講(岐阜)。
	5/13・15	小原、宮浦小で総合学習の授業。
	5/23～27	鷲尾、リバーレスキュー講習受講SRTレベル1取
	5/24～28	小原、関西キャニオニング研究会に参加。
	5/26	松本、自然に親しむ集いタイドプール観察会講師。
	6/23	松本・宏美、「屋久島の海辺生物ガイド」刊行記念観察会講師。
	7/28	松本・浜崎、自然に親しむ集い　スノーケリング講
	8/9	松本、環境文化研修センターのスノーケリング講
	8/27～30	明星学園研修修学旅行受入(継続中)。
	10月	NHK朝の連続テレビ小説「まんてん」始まる。
	10/9	パドルスノーケリング調査。
	10/10	松本、神山小学校2年生国語「サンゴの海の生き物たち」の授業。
	10/23	ひろみ結婚式(浜崎が高橋へ)。
	10/29～31	松本、国土交通省　自然ガイドツアー事業経営セミナー講師(軽井沢)。
	11/28～12/1	松本・藤村、エコツーリズム国際大会参加(沖縄)。
	12/11	屋久島観光協会ガイド部会設立　松本初代部会長に就任。
	12/19	松本、上屋久町環境学習研修会　講師。
	12/22～30	小原、台湾南湖大山(3742m)耶克糾渓遡行パーティーに参加。初遡行に成功。

以下、最終ページに続く。

そしてYNACの歴史は、いつまで続くのか…

この年、田口ランディが大ブレークし、絶版となっていた癒しの森が、ひかりのあめふる島として文庫版で復活。9月以降、文庫本を持って来る1人旅が急増。登場人物がサインを求められたりする。

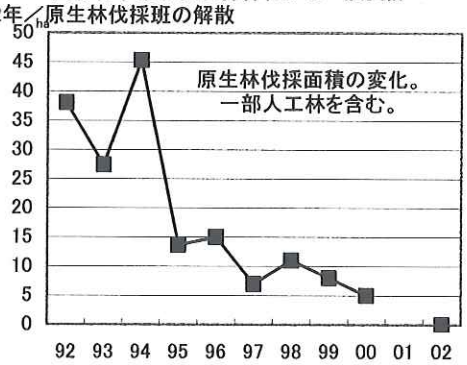
またアメリカの同時多発テロの影響で、海外旅行をキャンセルして、屋久島に来る人も急増。

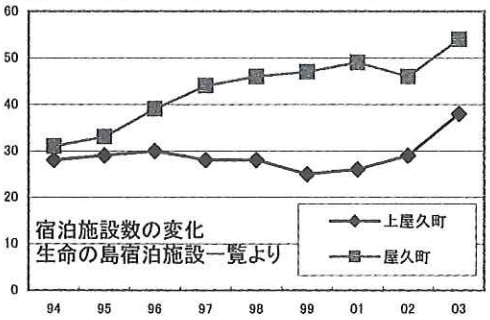
これらの影響で、02年冬は、空前の景気となる。ランディ効果はともかく、テロ以降世界情勢が不安定となり、屋久島への観光客の動向も読めなくなる。早く平和な世界に戻って欲しいものだ。

変わる国有林

島の8割を占める国有林も、この10年で大きく変わった。経営から管理へということで伐採が減少し協力金の徴収に力を入れ始める。02年にはついに屋久杉原生林の伐採が終了。

92年／森林生態系保護地域の設定
93年／屋久杉ランドで協力金の徴収開始
95年／上屋久・下屋久営林署が統合され屋久島営林署に同時に上屋久に森林環境保全センター設立
96年／白谷雲水峡で協力金の徴収開始
99年／営林署から森林管理署へ名称変更
国有林事業が独立採算性から一般会計へ
02年／原生林伐採班の解散



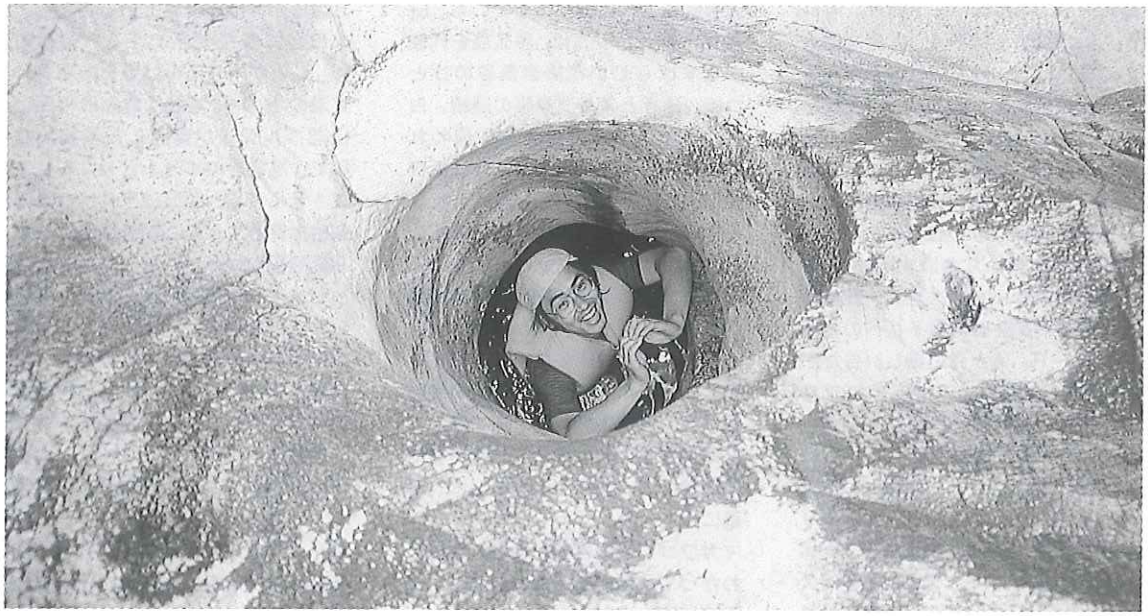


宿泊施設は、世界遺産登録以降、屋久町で増え、入込客数の微増と歩調を併せて増加している。これは屋久町の人口の増加ともリンクしている。かつては観光スポットは屋久町、宿泊は上屋久町といわれ、屋久町にはゴミだけが残されるという噂きを良く聞かされたが、今ではいわさきホテルの1人勝ちという声も。上屋久町の宿泊施設数はほとんど横這いを続けたが、両町とも02年に急激に増えている。01年9月のテロ以降、急激に観光客数が増えたのが原因か？とにかくこの1年素泊まり民宿が目に見えて急増中である。ガイドの急増も見られ、どこでも民宿、誰でもガイドの時代に突入したような勢いだ。

名車バブルス君。フロントにはYNACロゴが入っていた。

屋久島の渓谷ダイジェスト

小原比呂志



1. 深さ2mのポットホールにもぐりこんだ若き日の小原。安房川

屋久島の渓谷は、膨大な降水と隆起する岩塊という巨大な自然同士の全力勝負で作られる彫刻だ。年間降水量1万ミリを越える膨大な雨は、漏斗へ流れ込むように花崗岩摂理のひび割れを集中的に浸食して垂直に切り立ったゴルジュ（岩の切り立った峡谷部）を作り、一方で浸食に頑として抵抗する岩体は、そそり立つ滝となる。

このように花崗岩の比較的単純な摂理系に支配された地形は、地図や立体模型にはっきり現れるため、非常にわかりやすい。加えて島の周辺には、花崗岩マグマ熱で変成して非常に硬くなった堆積岩ホルンフェルスの壁が分布しており、これが水流のスムーズな流れ下りをさまたげて、地形にアクセントを与えている。山は立体なので、そこに標高に応じた植生がかぶさり、屋久島らしいさまざまな景観を作り出す。

ただし屋久島の谷は、摂理系から割れ落ちた巨岩が累々と谷を埋め尽くしていることが多く、源流から河口まで美しい渓谷が続くことはない。すばらしいポイントは点々と隠されている。

この原生自然の薫り高い渓谷群は国内でも熱心な溯行家を惹きつけ、多くの溯行記録が発表されている。しかし最近ではむしろ未熟な登山者が判断を誤って谷に迷い込むことが少なくなく、それぞれの渓谷の精緻な状況が分からないために、捜索する側に未知の危険が及ぶ可能性が高くなっていることも考えてゆかなければならない。

この一文は渓谷活動のできる専門家に読まれることを念頭に置き、今後の活動や情報収集のための基礎資料として、オリジナルの記録を基に、これまでに知られている屋久島の渓谷の概要をまとめたものだ。一般向けのガイドではないので、注意されたい。

北部の谷　屋久島は海岸からいきなり急斜面になっていることが多いが、これら北面の谷はむしろ谷の奥まで侵食が進み、宮之浦岳の

2. 森と滝が美しい宮之浦川鍋掛谷

3. 豪快なトイ状滝。白谷川

直下でいきなり高度を上げているものが多い。

宮之浦川本流は屋久島でもっとも有名なルートで、溯行者もおそらく最多だろう（といっても一年に数パーティーだと思うが）。屋久島最難ルート。エキスパート向け。河口から潜水橋までは平凡。本流は竜王の滝までは１ヶ所人工登攀を交えるが、比較的容易。竜王の滝の通過と、その上の滝を連ねたゴルジュの処理が核心部。新高塚小屋あたりで道に迷うと、この屋久島最悪の谷に入り込むことになりかねない。竜王の滝手前で左岸から合流する**Ｍ５谷**も短いがスケールが大きく、登り応えがある。**鍋掛谷**は障子岳への合理的なルート。滝と森の美しい谷だが、数年前に右岸大スラブ下のデブリが崩落し、連瀑帯は荒廃している。**カネオリ谷**は森はすばらしいものの、特に見所はなく、高塚への登降路にも使われた平凡な谷。カネオリ谷出合から下流は、流域のほぼ全体が伐採されている。**餅小屋谷**は大半が伐採されているが、上部には森が残り坪切岳へのルートに使える。それより下流の小さな谷は、ほとんどが未調査で、面白そうなものは見当たらない。永田北尾根側への登路に使える谷はありそうだ。下流で合流する**枇杷窪（ビャンクボ）**は、屋久島山岳会の記録によると、大滝がひとつあるがそれ以外は平凡。上流は皆伐され禿山になっている。**白谷川**下部ゴルジュは、屋久島を代表するすばらしい花崗岩渓谷のひとつで、泳ぎとスラブ登攀の連続。白谷雲水峡より上流は樹林に覆われ蘚苔林の雰囲気になる。水温は低いが滝や小ゴルジュの通過がそれなりに面白いが、人が多いので困る。

泊川は全流域がホルンフェルス。小さい川だが**本流**下部には連瀑帯やゴルジュがあり、なかなか面白い。上部は急傾斜の原生林で、紅葉岳に突き上げるが、未溯行。**左俣**の地獄谷下部にも連瀑帯があるものの、上部は伐採跡の藪になる。**一湊川**の旧道の橋の下、流水中の岩の上に、緑藻に似た、カワゴケソウ科のヤクシマカワゴロモの群落がある。全域にわたって伐採が進んだところで、土石流被害も少なくない。上流の支流群は溯行対象にはならないと思うので入渓したことはないが、どうだろう？

永田川の流域はすべて花崗岩で構成されている。**本流**は、下流の横河（よっご）から少しの間、美しい岩盤と大きなプールが続く。上流はひたすら巨岩帯がつづくのみ。しかし流域がほぼ原生林であることと、永田岳に直接突き上げる（神様の窪）ことができるのは魅力である。支流の**トガヨケ谷**は電光形の深い摂理ゴルジュが発達した本格的な谷で、高巻きのルートどりに右往左往させられる。源頭は平凡になり国割岳に突き上げる。**鳥越谷**はひたすら直線的なゴルジュで、途中のチョックストーン滝が越えられず、敗退したことがある。永田歩道から道迷いで入り込みやすいところだが、このあたりを下ってしまうとまず生還の見込みはないし、捜索もきわめて困難だ。熊本ヤブコギマーズクラブの記録によると、右岸の**コスギダ**（小杉谷．ということか？）は伐採されておらず、面白そうな谷だ。それ以外の上流の支流は、それほど魅力的ではないらしい。ただ**上タカヨケ**には連瀑帯があるようで、面白いかも知れない。

4. 川原北谷のホルンフェルスの小滝で遊ぶ

5. 瀬切川中部ゴルジュの美しいポットホール滝

6. 巨大なお谷が滝プールのテラスにて

7. 蛇之口滝上部は、２００mに及ぶ滑り台状のスラブ

西部の谷　西部林道に小さな沢がいくつかある。国割岳西面の大きな花崗岩斜面に刻まれた岩溝群といった趣で、照葉樹林の原生林につつまれ、野性味あふれるところだ。花崗岩ばかりではなく、海岸に沿って侵食され残ったホルンフェルスが残存しており、南側の谷ではいくらかホルンフェルスの小滝が続く部分がある。カンカケ岳の北西にあがる**シッデワタイノ川**は県道の上下に花崗岩の滝があるが、その上部は平凡。崩落が多いらしく、シマサルスベリの大きな木が多い。**半山川**は側斜面に大スラブが覗いていて登攀意欲をそそる。谷筋はひたすら巨岩帯と崩落跡になっているが、マイナー名峰である 1074m峰への登路としては悪くない。**川原北谷**と**南谷**は兄弟のような谷だが、北谷は小さいなりにホルンフェルス滝が続いたりして面白い。南谷は登っていないが、国割岳山頂までさほど困難なところはないらしい。

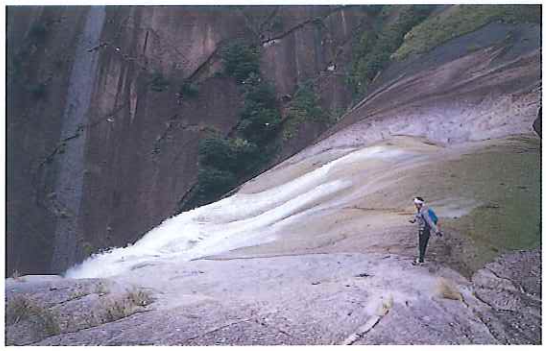
瀬切川には瀬切滝を始めとする規模の大きな花崗岩の連瀑帯が下部と中部にあり、美しいがほとんど登れず、高巻きの連続になる。しかし、岐阜に住む畏友松原憲彦氏は、信じがたいことにほとんどの滝を登ってゴルジュを突破したという。上流の支流はいずれも穏やかに永田尾根に吸収されているようだ。中部ゴルジュで合流する**国割岳南東面谷**には連瀑帯があるが、1993 年の台風の倒木で埋め尽くされていた。かつて瀬切川右岸の国有林伐採を巡って激しい戦いがあった。屋久島の自然保護のターニングポイントとして忘れることのできない場所である。左岸には大川林道が延び、ほとんど伐採されてしまったが、残された右岸の森には巨木が残るといううわさがある。

大川の、大川之滝とその後ろの短いゴルジュがホルンフェルス壁を断ち割るダイナミックな地形は、千尋滝とならんで屋久島を代表する景観だ。大川之滝は屋久島では珍しく４級フリーのすっきりした登攀が楽しめるところで、中央と左にルートがあり、中級以上の沢屋にお勧めできる（残置は少なく、ハーケンとカムデバイスを多用する）。その上はひたすら巨岩帯の続く一本谷。林道の橋より上は原生林になる。また最上流部の七つ渡し前後は屋久島でも屈指の美しい庭園系である。溯行後、森の深い花山歩道を下山できるのも魅力。

栗生川は、屋久島第３位の流域面積（約 5029ha）をもつ大きな渓谷で、河口の１ｋｍ上流で**小楊子川**と**黒味川**に分れる。**小楊子川**は栗生川の本流で、深くすばらしい原生林に流域の大部分を覆われた、屋久島を代表する渓谷。最下流の**お谷が滝**の壮大なホルンフェルスのゴルジュは、通過例がない。それより上流は右俣左俣ともに全面的に巨岩帯の谷だが、本流から**左股**にかけては、いくつかの山場がある。中部のコケシ岩ゴルジュは水が少なければへつりとチョックストンの割れ目登りで通過できるが、水量が多いときは右岸のこけし岩か左岸のスラブを大きく高巻く。左股ゴルジュは泳げば容易。左股源流の小楊子大

8. 鈴川二段ノ滝の落ち口にて

9. 鈴川の滝



１０. 鯛之川千尋滝の落ち口。

１１. 小田汲川。大ゴルジュを巻いた後のスラブ滝

滝は、左右から高巻ける。永田鞍部に上がる支流は連瀑で面白い。**中俣**は出合の滝以外は特に何もなく、深い原生林の中を流れているらしい。**右股**は平凡だが美しい渓流となって翁岳分岐へと突き上げる。**花之江河谷**は、源頭が庭園のような美しい平ナメになっている。

黒味川は源頭近くまでメンガクボ林道が入り、七五岳北壁の麓まで伐採されて流域全体が荒廃している。増水時に栗生橋から見ると中流部ケヅメのゴルジュの周辺だけは険しかったので伐採を免れ、いまも原生照葉樹林に被われている。このケヅメの通過は困難で、大阪わらじの会パーティーが下降に成功した以外は、すべて大高巻きに終始したようだ。支流のメンガクボの源頭には屋久島では珍しくまるっきり平らな地形があり、興味深い。

南部の谷　岩が膨大な降水に対してどれだけパワフルに拮抗するかで渓谷の美しさが決まる。そして長い時間をかけてその美しさは変化し続けるものだ。屋久島南部は岩のほうがやや圧倒している感があり、鯛之川を筆頭に岩の印象が強い。**湯川**は、下流に浅いホルンフェルスゴルジュがあるが、最大の魅力は数段 200mに及ぶ湯川の滝だ。下部と上部に大きな岩溝状の斜瀑を含み、一般には下部は右岸を巻き、中間の直瀑の落ち口を渡って上部は左岸を巻く。2001 年に鹿児島黒稜会がかなり水流に近いラインを登っているが、それほどすっきりしたルートではないようだ。この滝はむしろ下降したほうが面白いのではないかと思っている。源流部は原生林だが、一部の支流を除けば谷は平凡。鈴川や鯛之川へ継続するワイルドなルートとして価値がある。**大崎川（おさんご）**の源流は破沙岳の急斜面で原生林だが、記録はない。**鈴川（すすご）**もミドル級の谷で、これまた巨岩帯が基本なのだが、下部のホルンフェルスゴルジュ、左俣の蛇之口滝に奥の連瀑帯と山場がある。右俣は巨岩帯に終始する。流域は河口から源頭までほぼ自然林が続き、気持ちのいい谷だ。**二又川**は平凡。左俣にはスラブと滝があったようだが、数年前台風で崩壊した後どうなったかわからない。

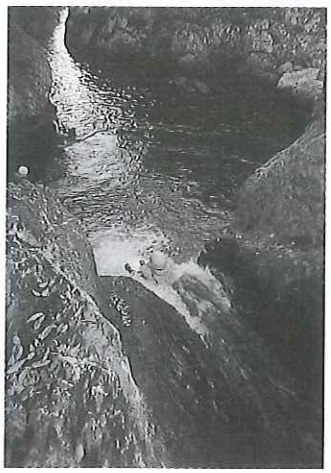
鯛之川（たいのこ）の千尋滝を中心とした壮大な峡谷部は、取水堰の建設によって原始性を失ってしまったものの、未だに最も魅力的だ。中部はときおり滝が現れるほかは延々と巨岩帯が続く。上流部は平凡だが穏やかで美しい渓流になりジンネム高盤岳の猛烈な藪に消えてゆく。割石岳に突き上げる支流にいくつか面白そうなものがあるが、あまり調べていない。本富岳の北面に突き上げる大渕谷（仮）にはいいゴルジュといくつかの滝があり、谷の中に差し渡し 30mほどもある屋久島最大級の転石がある。

小田汲川（おだくみがわ）は海岸近くに滝場があり、高巻いていって七面鳥小屋の裏にでたことがある。しばらく平凡な巨岩帯を行くと、取水堰のうしろに大滝がある。上流にはさらに２箇所手が出ないゴルジュがある。右俣にも左俣にも１箇所づつゴルジュがあるが、源流部は全面伐採され、息を呑むような禿山だった。隣の**中瀬川**はどうみても平凡以外のなにものでもないので入っていないが、どうだろう。県道下には滝があるかもしれない。**花揚川**はシダ図鑑によく名前が出てくる。海岸に小さな連瀑帯があるがそれ以外は全面平凡。源流近くで少し滝場が現れる。前岳へのルートとしては悪くない。

安房川　屋久島最大の渓谷。広々として支流も多く、屋久島で最も魅力的な流域かもしれない。海岸線に平行な摂理の割れ目が多いようで、本流には滑らかな岩盤とポットホールが、直角に入る支流には摂理をえぐる垂直のゴルジュとチョックストン滝が発達しやすい。

河口～荒川出合　**安房川本流**は屋久島を代表する一本だ。トンゴ滝から始まる花崗岩のおおらかな造形の美しさは、他に類を見ない。登攀的な難しさはそれほどのこともないが（4 級程度が数ポイント）、プールがとにかく大きく 100m 単位で徹底的に泳がされる。楽しい水系ルートの NO. 1。小杉谷・荒川ダム・千尋滝落口の 3 箇所で取水されてしまうため、本流の流量は非常に少ない。**千頭川（ちがみがわ）**の中部には規模の大きな滝とゴルジュがあり、通過は難しい。中島権現岳の対岸に合流する**テラヤマ谷（仮）**は源頭に大滝と平地があり面白そう

１２．安房川下部。美しい１０ｍ滝



１３．平地川のウォータースライダー

１４．落ノ滝の滝壺は大ポットホール

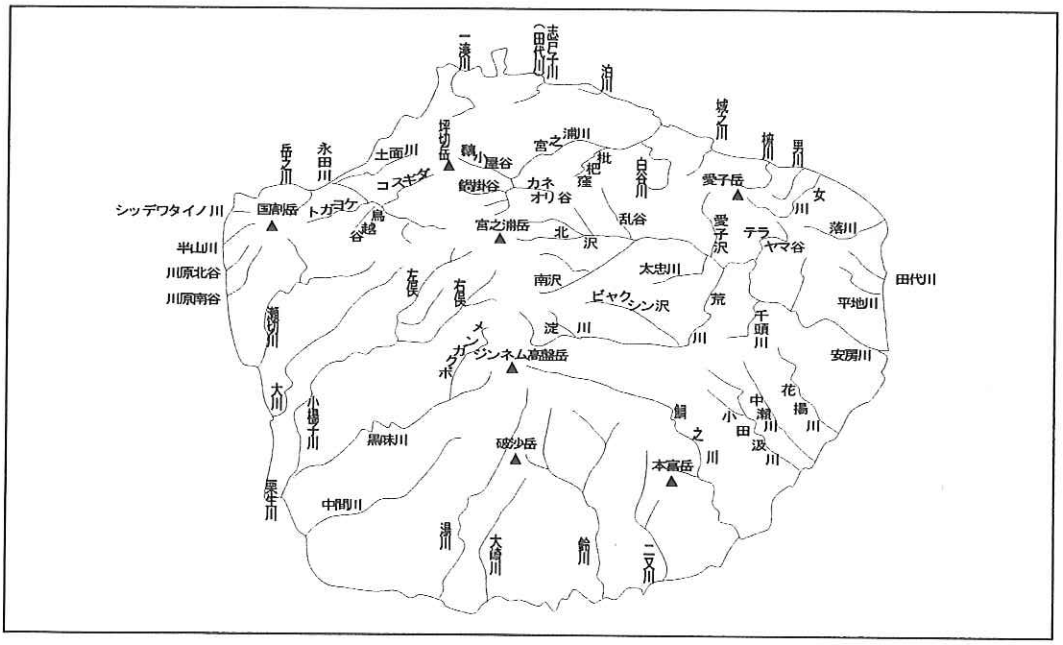
なところだが、まだ入っていない。

本流上部　以前は中島川といったらしい。このあたりはいずれ三岳クライマーズクラブで行くためにとってある。**北沢右俣**は大滝が多くこのあたりではもっとも谷らしい谷のようだ。縦走中に平石あたりから迷い込むと、取り返しのつかないことになる。**左俣**は平凡だが源頭部で栗生岳に向かって突きあがる谷はなかなか爽快らしい。**南沢**は果てしない巨岩帯で、伐採によって荒廃しきった流域だが、投石平に上がる本流の源頭だけは庭園風で美しい。また右谷の３本に分かれる支流のうち左のもの（三のクボ）は、いくつか滝が続いて面白いが、そのほかは強烈な藪が多い。左岸の**大杉谷**は小滝はあるが、規模が小さい。縄文杉から迷い込んでも、何とか助かるだろう。**乱谷**は調べていないが、源頭に巨木林がありそうだし、地図で見た限りでは面白いかも知れない。**愛子沢～ゲンタンクボ**は下流に２ついい滝があるが、それだけ。中間部は世界遺産だが源頭は伐採されている。**太忠川**はコケの多い深い森の谷で、伐採の遺跡が多く趣深い。上流に美しい滑滝がいくつかある。

荒川　安房川本流から淀川水源までが、川としては屋久島で最長。ヤクスギランドから上部左岸の伐採が屋久町の努力によって防がれた経緯があり、すばらしい原生林景観を間近に見ることのできる貴重なエリアだ。**本流**の荒川ダム～ヤクスギランド間は遡行していないが、ものすごい巨岩がありそうだ。ランドのすぐ上流はなかなか迫力のあるゴルジュになるが、その上は屋久島ではちょっと見ないような、まっ平らな渓流になる。紀元杉の上流で突然連瀑のゴルジュになり、その上は淀川小屋まで、多くのポットホールが刳り抜かれた美しい岩盤の谷に変貌する。支流の**石塚小屋谷**とランドで合流する**ビャクシン沢**にも美しいところがあるが、詰めを誤ると巨岩の迷路やヤブイバラの地獄にはまることになる。**太忠岳東面谷（仮）**は未踏だが、正規の太忠岳岳参り道のあったところで、大きな滝が一つあるのが分かっている。

東部～北東部ホルンフェルス渓谷

安房と宮之浦の間には大規模な谷はないが、屋久島のなかでは珍しく四万十層が厚く花崗岩を覆っているため、深く刻まれた暗いホルンフェルス渓谷が発達している。花崗岩ばかりの屋久島のなかでは、非常に新鮮な遡行や下降ができるところだ。スケールの割に水量が多く、泳ぎが多い。**平地川**（せいじがわ）、**田代川**、**落川**は県道から海岸にかけて暗い垂直のゴルジュをもち、登って面白いし、下降すると峡谷からいきなり自然海岸に飛び出してしまうシュールな展開が楽しめる。**平地川**は小規模な谷ながら、ちょうど竜天園の下に驚くような規模のワンポイントゴルジュがある。**田代川**は連続するゴルジュの中に手ごろな滝と青黒い淵が連続し、キャニオニング(下降)入門にももってこいだ。**落川**は県道の下流に深いゴルジュが海まで続き、しばらく上流には落ノ滝（おとすのたき）へと続く連瀑帯がある。その上流は平凡。**女川**はまだ遡行していないが、過去の記録によると、中流部に標高差５００ｍに及ぶ連瀑帯があり、屋久島でも有数のいい谷のようだ。源頭までホルンフェルスで、所々に花崗岩の貫入が入っている。**楠川**は下部に登れない連瀑のゴルジュがある。上部は各支流とも未遡行。林道終点の先を見ると悪そうな滝が連続している。**城ノ川（じょんこ）**は、下流にゴルジュがあるらしいが、未見。本流右俣は照葉樹林の中に滝を懸け、楠川前岳の伐採跡に突き上げている。



YNAC5年生

藤村 早苗

はじめに

今年の3月に同期入社のスタッフが辞め、ついにスタッフ一番の古株となってしまった。今年の6月にYNACで5年目を迎える。つまりYNAC「5年生」。改めて周りを見回してみると私の隣に住む家族の赤ちゃんは今ではおしゃべりができるようになっているし、小さかった重役の子供達は着実に大人になっていた。ゆっくりした屋久島の時の流れは確実に刻まれていたことに改めて驚きを感じるとともに、この区切りのよい年にYNACで過ごした日々を思い出してみようと思い、筆をとった。

1999年

屋久島へ来る前、私は神戸のホテルに務めていた。始めての有給休暇をもらえると聞き、一番に思いついたのが「屋久島」であった。というのは大学時代、旅行中に知り合った人々が口をそろえて「屋久島」の魅力を語っていたので、そのころからずっと気になっていた。早速資料を集めたが、一人旅となると何かと割高で、参加したいツアーがあっても「2名様から」と断られる始末。そして唯一、一人でも参加可能なツアー会社を発見、それがYNACだった。YNACでのエコツアーは黒味岳の登山に決定。念願かなっての屋久島旅行、宿へ着いても落ち着かず散歩がてら海辺へ出た。そのとき何気に見た海岸線が南の島のイメージ「白い砂浜青い海」ではなく「黒い岩壁青い海」であったのが印象的だった。しかしツアー当日、山を歩くと登山道の石は白く、小さなタイルのような四角い石が転がっている。不思議に思ってガイドに尋ねてみると、おもむろにリュックから「図説屋久島」が出てきて、屋久島の地質の話が始まった。次第に足元の石ころ一粒一粒がとても意味あるものに見えて、こんな小さい石ころにも世界があるのかと思い知らされた。この経験が、後の私の人生を変えることになってしまった。

ホテルウーマン時代のサナ(右)

「研修生募集」があることをYNAC通信で知り、即座に応募。それから屋久島へ移住できたのは半年後の6月。私が入る前にすでに二人の研修生がいた。二人とも女性で真っ黒に日焼けし、毎日ツアーのアシスタントをバリバリとこなしていた。私も見よう見まねで彼女達のように振舞うのだが、都会に馴染んだ体がいう事を聞いてくれない。初めて歩いた白谷雲水峡では体中筋肉痛になる始末。先行きが不安になった。

この年は例年になく雨の多い年で、いつまでたっても雨がやまない。思い通りにならないツアーにガイドも観光客も苛立ちが見え始め、ついに「雨でもがんばるYNAC」と掲げ雨の中、ツアーを敢行していった。川や森のコンディションは決して良くなく、ついていくアシスタントの私でさえつらいと感じることもあった。だが、ツアーが終わるとなぜか満足感が帰りの車にはあった。

9月に入り風も涼しくなった頃、「有燐堂カルチャークラブ」の屋久島ツアーが行われた。設立当初からYNACを受け入れてくれていた「有燐堂カルチャークラブ」にはなじみのお客さんも多く、穏やかなその雰囲気に私も自然と解けこみ、特に一緒に沢登りをした日は曇り空で寒かったにもかかわらずとても盛り上がった。私もいつしかお客さんと共にツアーを楽しんでいた。そこで何気に見たガイドの表情をみてハッとした。毎日大人数でハードなツアーをこなしているにも関わらず真っ先に飛び込んだり泳いだりと、一番楽しんでいるのがガイド自身であったからだ。

その帰りの車の中で私は体が疲れているのを感じながら、たっぷり遊んだ満足感に浸っていた。このとき初めてYNACの仕事がわかった気がした。

2000年

シーズンオフに「有隣堂カルチャークラブ」主催で海外ツアーを行うのが恒例になっていた。数あるツアーのうち、この年YNACが担当するのは「ボルネオ」ツアーであった。赤道直下のボルネオの熱帯雨林は全てが大きく、そしてゴチャゴチャ。でも次から次へと面白そうな物が出てくる、まるで「整理していないおもちゃ箱」のような森だった。私の姿が余裕で隠れるほど立派に成長した板根をもつ木々や、イチヂクの仲間は根を他の木に絡ませ絞め殺し、我が者顔で立っている。また、丸まると玉子くらいになる大きなダンゴ虫や、大きな鼻に太鼓腹のテングザルといった奇妙な動物たちが顔を覗かせる。森の見方を覚え始めた私にとって、屋久島ではないこの森はとてつもなく大きく感じ、次第に「森を見る」ことの面白さに惹かれていった。

この年の春、YNACには新しいメンバーが増えた。数多くの研修生希望者の中から選ばれし精鋭たちである。新しい研修生は二人とも女性、学校や大学の研究等で自然について勉強してきた者達だ。彼女たちから学ぶことは本当に多かった。中でも一番驚かされたのは、まるで「研修生」を楽しむかのように毎日ツアーに行く姿であった。指導するガイドにも熱が入り、毎日朝早くから夜遅くまでツアーに入り浸り。それでも二人で食事をしながらツアーについて語り合っているのだった。元気な研修生のおかげでYNACもより一層の盛り上がりを見せた。

2001年

春を迎える頃、研修生達もガイドスタッフとして独り立ちし、この年から以前より構想があったマウンテンバイク(MTB)ツアーが本格的にスタートした。

「西部林道でMTBを走らせたら絶対面白いよ。」とMTBツアーの話が持ちあがった。荒れた道を走るMTBツーリングしか知らな

かった私にはあまり気乗りのしない話だった。「とにかく走ってみてよ。」と言われ、とりあえずMTBを車にのせ西部林道へ向かった。しかしちょっと走っただけで、その考えが「食わず嫌い」ならぬ「走らず嫌い」であったことに気づかされた。西部林道はアスファルト舗装で走りやすい。そして、森がすぐ近くにあり様々な木々の表情や森を通り抜ける風を間近で感じられる。また、サルやシカたちとの距離も近く、同じ空間を共有しているんだという実感が湧いてくる。とにかく今までとは違う視点の西部林道だった。MTB ツアーへの小さいながらも確かな確信はYNACのスタッフ、また地元の方々の協力もあり形作られ、ようやくこの年の4月に幕開けとなった。あいにくデビューの日は雨模様になり、お客さんと私達はすっかりずぶ濡れ、泥だらけという状況。しかし、最後はお客さんのカメラで記念撮影、笑顔でパチリ。ツアーは無事終了したのだった。新しい西部林道の楽しみ方が確立した記念すべき一日となったのである。

この年、研修生募集はなかった。にもかかわらず果敢に自分を売り込んでくる女性がいた。始めて会ったときはまだ春とはいえ寒い日で、すっぽり毛糸の帽子をかぶって大きなザックを背負った彼女の姿にはただならぬ雰囲気を感じた。彼女のYNACへの強い熱意は重役達のハートを捕らえ、異例の研修生受け入れが決定した。研修は3期目ともなると厳しさが増し、様々な課題が彼女に課されていく。しかし、全身全霊で取り組む彼女の姿は本当にたくましく思えた。この年、YNACに再び新しい風が舞い込んだ。

2002年

この年の春、森の中ではサルやシカの子供が実にたくさん産まれ、「ベビーブーム」となった。西部林道でMTBを走らせていると、サルの群れを見つけては赤ちゃんザルのかわいらしさに目を奪われる幸せなツアーを過ごす日々が続いた。

暑い夏を迎える頃、小さいが屋久島に直撃する台風が目立った。いつも「来るぞ！」と身構えていたら西に東にそれるというのが続いていた為、今度もそれるだろうと思っていたら、ドーンと一発 7 月の初旬にやってきた。「やれやれ…」と思っていたら、8 月の終わりに物凄いのがやってきた。大型の台風9号はスピードが遅く、しかも屋久島付近でカーブをかけたものだから、より一層スピードが落ち 10Km/hまで落ちた。私が MTB に乗って平地を走るスピードが大体 15Km/h…この台風と勝負したらなんと私のほうが早い！？こんなたまらなく遅い大型台風のため屋久島への交通機関のすべてが長らくストップ。島へ入る人も出る人も動けない、そんな日が2日間も続いた。大荒れの天候でツアーも中止が続き、お客さんからもキャンセルの連絡が頻繁に入る。いつまで続くのかと途方にくれていた 3 日目、ようやく昼便より飛行機が動き始めた。キャンセル待ちは優に 300 人を越していたという。台風は勢力も問題だが、スピードが遅いのも実に厄介。読者の皆様も台風シーズンには気をつけて。…でも、これもまた屋久島の一面でもある。

そしてその後、屋久島は秋口まで夏休みの賑わいが続いた。この年の9月、アメリカで世界貿易センタービル爆破テロ事件が勃発。そのため海外旅行をキャンセルした方々が屋久島への旅行に切り替えられたため、忙しい日々が続いていたのだ。しかし、忙しいとはいえ、屋久島は穏やかな時間が流れていた。同じ青空の下でそんな恐ろしい事件が起こっているとは信じがたかったが、世界は着実に変わっていた。そして、天候に、世界情勢に、これだけ左右されるこの島の「観光」という仕事の厳しさを改めて感じた一年だった。

2003年＊まとめ＊

この2月、私は「風の旅行社」主催の海外ツアーで「ボルネオ」ツアー同様YNACスタッフが講師を勤める「タスマニア」ツアーへ参加した。この地の森もボルネオに負けず劣らず面白く、中でも印象的だったのは数多くのユーカリ達であった。オーストラリア全体では約 600 種といわれているが、そのうちタスマニアでは 29 種存在するという。様々なユーカリを見たが、いずれも大きくその枝ぶりはダイナミックで格好良かった。また、雨上がりのユーカリの森は彼らの放つ揮発成分のお陰で清々しい香りが立ち込めるのだ。屋久島にはない木に新鮮さを感じていたが、彼らの作り出す樹幹が屋久島の照葉樹林で見慣れたモコモコの「ブロッコリー」であったのも惹かれた要因かもしれない。

屋久島に帰り、ヤクスギランドの森を歩くと、雨が降り美しいレインフォレストとなった。その中で見た屋久杉は見慣れているにもかかわらずとても大きく感じ、そしてタスマニアでみたユーカリ達に負けず劣らず格好良かった。この美しい森をいつまでも眺めていたいと思った。

YNAC10年目の春は、良い天気が続き、春恒例の長雨・「木の芽流し」を知らずに終わった。だが、屋久島の森は新緑を迎え、今年も安房川から眺める森は見事であった。うららかな春の日差しを感じながら、安房川でカヌーを浮かべているとさわやかな風が吹き抜けた。毎年この風のお陰で屋久島の森は素晴らしい新緑を迎えることができる。この森同様 YNAC にも毎年いろんな風が吹きぬける。今年はどんな風が吹き、YNACはどんな風に変わってゆくのだろう。時に変化していくことは寂しいときもある。「昔は良かった」というセリフもよく耳にする。しかし、私達はこの森のようにいつも新鮮に変わっていけたらいいな、と思いながらカヌーをこぎ始めた。

現在のサナ（永田岳）

屋久島ガイドブックの10年

岡田 愛

はじめに

YNAC創立後、程なくして屋久島が世界遺産に登録され早10年。「世界遺産になってから観光客が増えたんじゃないですか？」…とよく聞かれるが、実際には微増であり、必ずしも巷に言われるほど大幅に増えたわけではない（市川の年表参照）。とはいえ、世界遺産登録をきっかけに、「世界遺産」と言う言葉とともに屋久島を取り上げた記事がそれまで以上に世の中に出回ったことも事実である（松本の文章参照）。

それでは一体、旅行者は何を見て屋久島に来るのか。情報社会の今でも、旅をしながら携帯片手にネット検索するよりは、電話線がなくても電波が届かなくても使える、いつの時代も「情報誌」が便利だったりする。書く言う私が情報収集下手ゆえに各観光地の情報誌をよく利用するわけだが、恥ずかしながら出身地の「神戸」市街ですら「るるぶ神戸」片手に観光したくらいである。要するに、私に限らず情報誌に操られて観光する、そんな人は少なくないと思うのだ。それは、裏を返せばガイドブックで取り上げられた場所や内容がその時代時代に旅行者が求めるニーズも反映することになる。そこで、今回は屋久島を取り上げた「ガイドブックの10年」と称してこの10年、旅行者が屋久島のどこに注目してきたのか、その変遷をガイドブックの内容から考察することにした。

まず、屋久島を紹介した書籍を片っ端から集めてみた（表1）。

10年以上前のガイドブック

表1は、この 10 年間に限らず、屋久島を紹介している書籍を集めた一覧表である。多彩な風景美を織り成す屋久島にあってすぐれた写真集も数多く出ているが、ここではあえて割愛させていただいた。それでも、自然生態系を専門に取り扱った書籍やエッセイ等々を含めると、意外にたくさんあるものだ。

表1. ガイドブック一覧

	年	月	日	書籍名	著者 出版元	分類
①	1968	4		屋久島 美しい豊かな自然	赤星 昌 茗渓堂	自・歴・登
②	1976	4	1	九州[Ⅱ]沖縄 宮崎/霧島/鹿児島/人吉/屋久/奄美	日本交通公社 交通公社の新日本ガイド	観
③	1980			屋久島の自然	松田幸治 八重岳書房	自・歴
④	1983	7	20	自然探訪 屋久島	大山勇作 書泉フローラ	自・歴
⑤	1984	5	10	屋久島の自然 付/屋久島ガイド・ガイドマップ	日下田紀三 八重岳書房	自・歴・観・登
⑥	1984	5	18	團伊玖磨にっぽん島の旅⑤ 星砂きらめく碧い楽園 沖縄・薩南の島々	團伊玖磨 中央公論社 屋久島 p13-25・p34-35	自・歴
⑦	1985	5	20	観光ガイドブック⑥ 屋久島 ～自然と文化～	松田幸治 南國出版	観・歴・登
⑧	1988	5		屋久島の自然観察	(財)日本自然保護協会	自・歴・登
⑨	1994	2	25	世界の自然遺産 屋久島	田川日出夫 NHKブックス	自
⑩	1994	9	20	屋久島の旅Q&A	小田原直子 八重岳書房	観
⑪	1994			世界遺産 屋久島	日下田紀三 八重岳書房	自・歴・登
⑫	1995	5	20	屋久島 巨木の森と水の島の生態学	湯本貴和 講談社	自
⑬	1996	7	25	自然ガイド 屋久島	太田五雄 八重岳書房	自・歴・観・登
⑭	1997	11	21	癒しの森 ひかりのあめふるしま屋久島	田口ランディ ダイヤモンド社	エッセイ
⑮	2001	8	20	世界遺産の森 屋久島	青山潤三 平凡社新書	自
⑯	2002	4	20	屋久島 自然観察ガイド	日下田紀三 山と渓谷社	自・観

＊自然解説…自、歴史・民俗…歴、観光情報…観、登山情報…登

るるぶ情報版 屋久島・種子島・奄美

＊最大カット：特集ページで一番大きな写真で紹介された場所

	年	月	日	表 題	特集（ページ数）	最大カット	エコツアー
Ⅰ	1993			るるぶ鹿児島 94	なし	＊	×
Ⅱ	1994	8	1	るるぶ南九州 94-95	なし	＊	○
Ⅲ	1994	11		るるぶ鹿児島 95	P116(1)	西部海岸線	×
Ⅳ	1995	8		るるぶ南九州 95-96	なし	＊	×
Ⅴ	1995	10		るるぶ鹿児島 96	P117(1)	大川の滝	×
Ⅵ	1996	8		るるぶ南九州 96-97	なし	＊	×
Ⅶ	1997	11		るるぶ鹿児島 98	P116～P117(2)	紀元杉	○
Ⅷ	1997	5	1	るるぶ屋久・種子・奄美 98	P4～P6(3)	縄文杉	○
Ⅸ	1999	7	1	るるぶ屋久島・奄美 99-00	P4～P7(4)	縄文杉	○
Ⅹ	2001	3	1	るるぶ屋久島・種子島・奄美 01-02	P8～P13(6)	苔むした森	○
Ⅺ	2002	4	1	るるぶ屋久島・奄美・種子島 02-03	P2～P7(6)	苔むした森	○

表2. るるぶ情報版(特集ページ)が紹介する場所の掲載割合変遷

BOOK No. / 紹介場所	② 1976	Ⅱ 94-95	Ⅲ 1995	Ⅴ 1996	Ⅶ 1998	Ⅷ 1998	Ⅸ 99-00	Ⅹ 2001	Ⅺ 02-03
縄文杉(屋久杉)	+		+			2／3	3／4	2／6	2／6
白谷雲水峡	+			+		+	+	1／6	1／6
ヤクスギランド	+			+	2／3		+	1／6	1／6
滝(大川・千尋など)	+			+		+	+	+	+
その他1 公園、建造物、施設	1／3			+		+			
その他2 上記以外の山や森	+		+					1／6	2／6
エコツアー掲載ページ数		1	×	×	×	1	2	3	5

＊例)2／3……3ページ掲載中2ページを占めた記事、+…ワンカット(1ページ未満)のみ掲載された記事

ただ、どこに重点を置くかは本によって多岐にわたる。表1の一番右の「分類」項は、各書籍で取り扱われている話題の割合を字の大きさで表してみた。

古い書籍には名所やグルメなど、いわゆる「観光」を主体に取り扱ったものが少ない。大半は屋久島の自然や歴史に詳しく、今や非常に貴重な記録写真も含めて屋久島今昔を見比べるすぐれた資料には違いないが、いささか堅くまじめで「教材」的なのだ。しかも、登山情報は縦走などハードな登山が中心で、一般旅行者向けコース(白谷雲水峡やヤクスギランド等)の紹介は名前だけか、ほんの 200 字程度。むろん、海や川のアクティビティなど論外である。

要するに、この頃は島へのアクセスも悪く、観光客と言うとマニアな登山客に限られていたせいか、ガイドブックに「遊びに行こう！」的手軽感が伺えないのだ。ちなみに②はYNAC松本提供で、社長が始めて屋久島に来る時購入したものである。

この10年のガイドブック

この 10 年は、屋久島に限らず観光地に関する情報ソース発達の 10 年である。インターネットだけでなく、情報誌も種類豊富でより分かり易くなり、屋久島のガイドブックも「教材」的な本から「遊びに行こう！」的フレンドリーな本へ移行していった 10 年とも言える。例えば「るるぶ情報版」は、種類も豊富で全国紙として影響力が強く、何より旅行者のニーズを把握した(い)JTBが作っているだけに、旅行者がこの 10 年屋久島のどこに注目してきたのか、その変遷を知る面白い材料である。

そこで、さっそく「るるぶ情報版」で屋久島が登場する号を過去 10 年分探してみた(表 1 下)。世界遺産(1993)になっても、屋久島は当初県内のイチ離島として「るるぶ鹿児島」「るるぶ南九州」にわずか 2 ページほど登場するだけ。それが、98 年度版から「るるぶ屋久種子奄美」として突如他の薩南諸島を出し抜き、屋久島が表紙を飾る。まずこれだけでも屋久島への注目度が高くなったことが伺える。

さらに、るるぶ各号を見比べると内容にも変化が見られる(表 2)。るるぶ情報版は、各地域や島のエリアガイドとは別に、カラー写真で各所を魅力的にアピールする特集カラーページを持っている。屋久島の文字がるるぶの表題に登場してからは、屋久島に関するエリアガイドのページ数(10 ページ)に大きな変化はなかったが、この特集カラーページ数と内容に、屋久島のどこが注目されているのか、その変遷を見ることが出来た。

「るるぶ鹿児島」では、世界遺産登録前の 94 年度版は特集ページすらなく、エリアガイドもホテルや名所に限られたこれまでのガイドブックと変わらない内容だった。それが、95 年度版から特集ページが組まれるようになり、「自然」と言う言葉とともに、森や滝などのカラー写真で屋久島のビジュアル的な美しさが表に出てくるようになる。

そして、「るるぶ屋久種子奄美」になった 98 年度版からはさらに特集ページが増え、表 2 のように、扱う内容は相変わらず縄文杉に割くページは多いものの、年々屋久杉を含めた「苔むした森」に割合がシフトしていることがわかる。従来バス観光コースとして数十分程度立ち寄るくらいで、ガイドブックにも名前くらいしか登場しなかった白谷雲水峡やヤクスギランドが、今や美しい写真とともに見開き 1 ページを飾るようになっているのである。

ガイドブックに見るエコツアー

YNAC創立から10年、ガイドブックを見て行くと、その内容は「教材」から遊びに行くための「手引き」に変わり、扱う観光形態は明らかにつまみ食い的な「名所を巡る」スタイルから「自然そのものをゆっくり味わう」スタイルに移行しつつある。

また、ここ 2, 3 年YNACカウンセリングシート“情報ソース”欄で圧倒的に目につく「田口ランディ」の文字。ガイドブックではないが、彼女が世に出した「ひかりのあめふるしま屋久島(1997)」は、広くエコツアーを紹介する情報源となった。

「るるぶ情報版」もランディ本と時を同じくして「るるぶ屋久種子奄美」を刊行。その頃から観光情報としてエコツアーに該当するツアーの掲載ページも増えていく(表 2)。

このように、ガイドブックから旅行者のニーズを見てみると、そのゆるやかに変わっていく屋久島旅行に対する嗜好が着実に自然を味わうエコツアーを支持し始めたことが伺える。

しかし世界遺産になったからと言って 93 年以降にわかにガイドブックの掲載内容が大きく変わったわけではない。むしろ松本の“YNAC10 年の歩み”にもあるように、マスツアー時代は中々受け入れられなかったエコツアーを YNAC が必死にアピールし、これによってエコツアーという観光形態が徐々に認識されていった過程がガイドブックの内容にも反映されていったと言えるのではないだろうか。

この 10 年、屋久島観光の発展はエコツアー発展の 10 年でもあった。しかしまだ 10 年、これから新たな課題が立ちはだかる。

私がYNACに来てからたった 3 年間にも屋久島でエコツアーの旗をかかげる業者が飛躍的に増え、今度はエコツアーを選択するのが難しくなってきた。つまり、あふれる情報の中から、エコツアー業者を選択するために新たなガイドブックが必要となってくるのである。これからはニーズにあったより質の高いツアーが生き残る戦国時代となるであろう。次の 20 周年はどんな考察をしているだろうか…。

おしりにやさしいもの10選 ～屋久島編～

鷲尾 紀子

はじめに

YNAC通信13号で私は‘正シイ野糞ノススメ‘と題して野外での用の足し方について、触れた。そしてこれを読んだ民宿オーナー、長井三郎氏から「野糞道とは、紙を使わないことから始まるのではないか。」と手紙を頂いた。「なるほど」と妙に納得しているところへ、徹底して毎日野糞をたしなむ写真家伊沢正名氏とその妻、直子氏と知り合う。そこに屋久島の写真家、山下大明氏も加わり、冗談のようにできあがったのが、「野分け会」。名だけ聞くと非常に雅なのだが、実はこれ、機会あらば野に分け入り、野糞をたしなむ会なのである。

YNACは今年 10 周年を迎える。「私も何か、皆の様に語れるものを…」と考えたら、やはり自分には「野分け」がぴったりだと思った。よし、10周年の‘10‘にちなんで、お尻を拭く際によく使われる物を 10 個選ぼう。ということで、普段名だけで特に志高く活動しているわけでもなく、あくまでも個人レベルでこそこそと「野分け」(野糞)を楽しんで…、いやいや日々研鑽している、「野分け会」の面々と緊急会議を開き、酒も飲まずに真剣に話しあった。今回の10選は、メンバーの「柔らかふき取り派」と「固めこそぎ派」という好みの派閥に私の好みを混ぜ込んだという極めて私的なものである。

お尻に使いよいモノ 10の条件

まず、お尻に使いよい物とはどういうものだろうか？その条件を 10 ほど挙げてみよう。(右上表)

これらの条件を見てみると1はマナー、2, 3 は利便性、4, 5, 6 は実用性、7, 8, 9, 10 は快適さを表している。この 10 の条件すべてを満たす物は…と考えたがやはりパーフェクトな代物はないようだ。では、普段我々が使う物はどんな具合なのか、評価してみたい。その方法として、1～10の各条件を1つ満たすごとに1ポイントをというポイント制(単位:うんち)を使おう。(右下～次頁表)

お尻に使いよいモノ　１０の条件

1. 珍しいものでない

決して希少種などをとってはいけません。

2. 手が届く範囲にある

森の中で葉を手に入れるのは案外大変である。

あの葉がいいなと思っても、鹿のように見上げることしかできなかったりする。

3. 季節を選ばない

いつでも手に入るという安心感が素晴らしい。

4. 丈夫である

破いて指でお尻を突かないためにも、最低限の耐久性は必要だ。

5. 大きさがある

葉などは多少小さくても枚数でカバーできる場合もある。

6. 拭きとり易い

葉脈が目だつ葉などは非常に具合がいいんです。

7. 柔らかい

硬いものは‘こそぐ‘という作業に使えるが、やはり仕上げは柔らかいものがよい。

8. 湿り気がある

地面に落ちているものは案外しっとりとしている。

9. うぶ毛がある

10. 香りがある

お尻にやさしいモノ１０選

ツワブキ

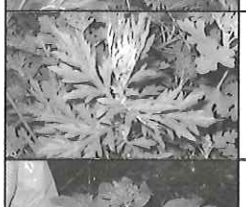
語源が「拭く」からきていることもあり、昔からおしりに愛用されていた。足元に育つため、しゃがんだ姿勢のまま手に入れる事ができるという優れものだ。葉裏の葉脈がデコボコしており、また産毛も生えており、実に使い心地がよい。若葉は非常にすばらしい産毛をもつのだが、食べるとおいしいので尻に使うにはもったいなかったりする。

8うんち

アオノクマタケラン

里山の林床にある植物。ツワブキよりも丈夫で大きさもある。ただ、葉っぱそのものはつるつるしているので、半枯れ状態のしっとりした物があればその方が使いよい。生姜の仲間なので香りもなかなか良いのだが、腐りにくそうだ。

6うんち



ヨモギ

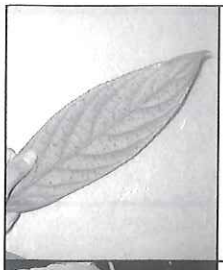
葉一枚では小さいので茎ごとまるめて使うとよい。軽くもんでやるとさわやかな芳香もついてきて非常に爽快感を伴う葉だ。長井三郎氏のお気に入り。

6. 5うんち

アブラギリ

日当たりが突然良くなった場所に生えているパイオニア種である。屋久島では林道脇に多く育つ。幼木も多いので、比較的、手に入れやすい。葉の大きさと落葉樹ならではの柔らかさが使いよい。

5うんち



アオバノキ

照葉樹の中でもしっかりとした葉を作る。そして、葉裏のざらつき感、葉脈のでこぼこ具合となかなか頼りになる一枚だ。里山の林床に育つ。「あまり高木にならないから、この木の下はちょうどいいんだよねー。」と、散歩に出かけてはこの葉にお世話になることの多い長井三郎氏は語る。

5．5うんち

新芽

照葉樹・落葉樹共に、新芽は柔らかく、うぶ毛を持つ物も多い。春はいろいろと種類が楽しめて目移りがしてしまう。お尻にも最高の使い心地を提供する代物だ。ただ、季節を選ぶという事と、枚数を必要とする場合が多いので、多少なりの罪悪感がついてくる。実用性よりも快適性のポイント高し。

4うんち

落ち葉

落ちて間もないものが良い。いろんなタイプがあるので、大きさ柔らかさと自分に合ったものを選ぼう。照葉樹は落ち葉でも充分強度があり、逆に落ちることでしっとり感もでてくる。春先は新芽が出ると同時に引退する葉も多く、ユズリハやヤマグルマなど種類も豊富。一方、山下大明氏のお気に入りが、秋に一斉に葉を落とす落葉樹の落ち葉だ。ハリギリの紅葉した落ち葉は柔らかさといい、しっとり感といい最高だそうだ。

7．5うんち

スギ葉

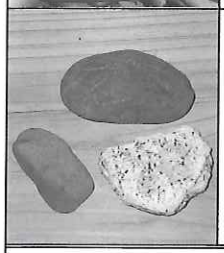
「えっ、痛そう。」と思いでしょうが屋久島のスギは大きくなるとトゲトゲというよりボコボコになる。‘こさぐ’という作業にはうってつけだ。ただし、使う向きには注意しよう。森の中では落ち葉同様手に入れやすい。私はよくこれにお世話になる。

5．5うんち

ヤ XXX シャ XXX

標高1500mを越えてくると、梅雨時の美しい花を咲かせるこの植物に出会える。葉裏のビロード状の産毛は思わずほお擦りしたくなる仕上がり具合だ。奥山の下草の少ない林床でも手に入れやすいからありがたい。固めの葉の縁でこさぎ、葉裏で仕上げという、一枚で二役こなせるマルチな葉。…なのだが、保護地区に育つ為見るしかできない。ああっ、残念！

6．5うんち



石

里では河口近くの川原にある玉石、山では花崗岩の正長石がよい。お尻にやさしそうな角のとれたものを選ぼう。日当たりのよい所の石はほっとする暖かさをもっている。逆に、雨で濡れていてもそのシットリ感がまた別の良さを持つ。ただ、仕上げはやはり別のものを使いたい。

5．5うんち

番外編

インド瓶

ペットボトル等を使う天然ウォシュレット。ずばり、水洗い。野分け会変態長でもある伊沢正名氏は、トイレに行くことを昔から「インド行き」と言う。小原がタイでこの水洗いにすっかりはまり持ち歩く水を「インド瓶」と呼び出す。葉でこさいだ後にこのインド瓶で仕上げる。

アジアの基本、「インド瓶での水洗い」ぜひ一度ためしてみては？思った以上に清潔爽快なのだ。えっ？ぬれたお尻はどうするかって？…自然乾燥です。

１０選　結果発表

手軽さナンバー1の落ち葉も捨てがたいが、さすが!!昔からの貫禄がものをいったか。単独で勝負に出た「**ツワブキ**」がチャンピオンに決定！皆様はどれがお好みですか？

ところで…

最近山トイレが変わろうとしている。「臭い」「汚い」が定番だった山トイレが、「臭わない」「水洗」に変身しつつあるのだ。しかもこのトイレ、汚れた水を「浄化」してしまう。中には、この汚水を土壌に流すことなく再利用してしまうというスグレモノまである。そう！これは、利用者の快適さの問題、し尿の垂れ流し問題を一気に解決してくれそうな、超ハイテクトイレなのだ。（ちなみに建設費にも超がつく）

全く、よく考えるよなーと関心しつつも、この新しい時代の到来を感じさせる最新式山トイレ、実は私は気に入らない。なぜって、私は非日常の刺激を求めて自然の中に入る。なのに、トイレがこんなに日常では感動が薄れてしまうではないか。そしてこの最新式山トイレ、「臭い」「汚い」ものに蓋をしてしまった。この快適さが実に怪しい。そもそも、自然の力で浄化できない程の人が山にはいるために、トイレにこんなに沢山の汗とお金を費やさなくてはいけなくなった。環境に良い悪いは別として、従来のぼっとん式ならこの問題が露骨に見えていた。が、こんなに便利で快適になってしまっては、もう誰もそんなこと気にしなくなるのではなかろうか？

しょせん、野党のつぶやきだとは、重々承知の上で言わせてもらう。私は自然の中にいる時位は自分の行いにきちっと向き合っていたい。つまり、自分の大切な遊び場を、生かすのも殺すのも自分自身であるという意識を持っておきたいのだ。そういう意味でも、やはり自然には「野分け」が似合う。

お気に入りの葉っぱを片手にゆっくりとくつろげる物陰を探し、少し穴を掘る。周りの景色にぼーっと見入りながら用を足し、終われば葉っぱも一緒に腐葉土の中に埋めてしまう。…なんともシンプルで良いではないか。

「野分け」…これは、人間という生き物として当たり前の自然な行為なのです。

ヤクサバの10年

高橋 宏美

はじめに

屋久島で暮らして早4年。屋久島ならではの海の幸も色々と食べてきた。アカジョ、アカバラ、ミズイカ、ヤクサバ、トビウオ、ヘキ、オジサン…と挙げていったらきりがない。中でも首折れサバは格別美味しいと思う。そこで今回は島の人間ならば食べたことがない人はいないであろう屋久島を代表する「サバ」に的を絞り、その10年の水揚げ量や価格の変化を追ってみようと思う。

ヤクサバとは？

まずはじめに・・「ヤクサバ」とはなんぞや？

「ヤクサバ」とは屋久島のサバの総称。サバの種類はゴマサバ。ゴマサバは巷で出回っている別種のマサバと比較するとよりプリプリっと太りほど良く脂がのって大変美味。(ちなみに有名な関サバはマサバです)屋久島ではこのゴマサバを2種類の方法で出荷している。

① 首折れサバ

屋久島のサバと言えばまず「首折れサバ」。その名のとおり首を折ったサバのこと。首を折るのは鮮度を保つ為。夕方サバ漁から港に戻ってくると、船につんである丸い網を自分の船の横に設置し、いけすを作る。そしてその中へ獲ってきたサバをはなす。サバはいけすで一晩生かしておき、翌朝首を折り、しめたのち業者に引き渡す。獲ってすぐしめるのではなく、できるだけ食卓にあがる直前まで生かしておくことでより鮮度が保たれる。だから屋久島ではサバを刺身で食べられるという訳だ。

② マルサバ

獲ったサバの首を折らずに用途に応じて冷凍したり、塩をしたりと加工されるものを「マルサバ」という。焼酎のあてに最高な「サバブシ」はマルサバを加工したもの。ちなみに首を折ると見た目が悪いのでマルサバとして使えない、というか勿体なくて使えない。(その訳は以下のとおり)

ここで、両者の価格には大きな違いがある。

刺身で食べられる首折れサバの方が加工されるマルサバよりもはるかに高価だ。

2002年の水揚げによるとkgあたりの平均単価は、マルサバが345円に対し首折れサバはなんと1100円！格が違うのだ。(サバが本当にあがらない時は1匹3000円になることがあるそうだ！)ちなみに島のｽｰﾊﾟｰ「わいわいら★ど」では本日丸々と太ったピカピカの首折れサバが一匹(約1kg)1300円で売られていた。今夜のおかずにするにはちと高い…とうらめし顔でがっちゃんを買う私であった(泣)。(※がっちゃんとはあじの子供のこと。板前であるうちの旦那様がそう呼んでいた。1パック約120円)。昔はただ同然で首折れサバが食卓に上る時代があったそうで、本当に羨ましい限りだ！

また水揚げ量を比較すると、よりもうかる首折れサバを出荷した方が当然売上につながるわけで、その数量はマルサバ3.5tに対し首折れサバは26tと断然多い。それでは全て首折れサバとして出荷すれば儲かるではないかというとそうはいかない。買い付け業者の首折れサバを買う数は決まっているそうで、その為一人の漁師が水揚げできる首折れサバは20匹まで(2003年現在)という規制があるそうだ。

年々水揚げ量は減っている!?

20年前の一湊では漁協前の広場一面にサバがずらりと並ぶ程水揚げがされていたそうだ。その数およそ100t！丸々太ったサバ1匹がおよそ1kgとすると、その数は約10万匹だ！しかしここ最近の平均は50～60t前後。5万匹から6万匹といったところか？目標売上も10年前が3億円に対し現在は2億円。年を追う毎にサバの数はこのまま減少方向にあるのだろうか・・？

ここで下のグラフをみてほしい。これはおよそ10年間(92年～02年)において上屋久町のサバ全体の生産量とそれに対する生産額がどの様に変化しているかを表している。折れ線グラフは生産量、生産額ともに山あり谷あり・・と波をうっているのがわかる。この10年間でサバ漁はサバが獲れたり獲れなかったり、それに伴い生産額が下がったり上がったり…と変動を繰り返しているようだ。

①海の自然環境の変化

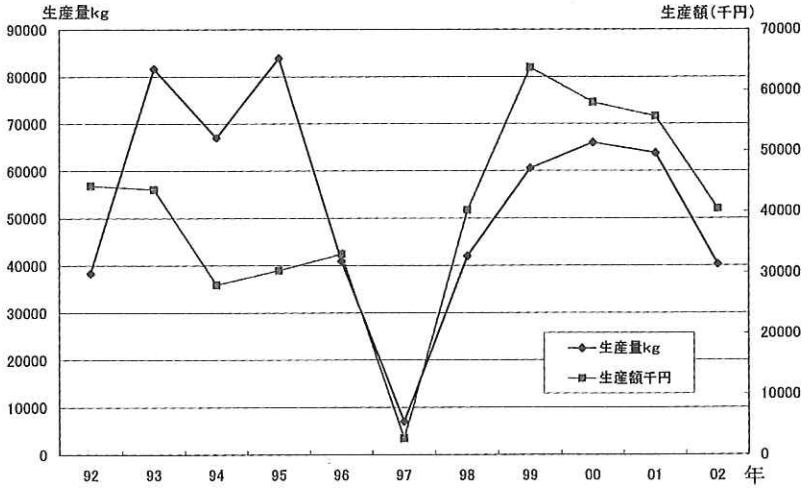
さてこのグラフ、96年～97年にかけては一際大きな落ち込みがある。97年においてはサバがほとんど水揚げされなかった様だ。この間に一体何がおこったのだろう？そこで一湊のサバ漁を営む漁師さんにお話しを伺った。

「この年(97年)は他の年に比べると海水温が異常に高い年だったよ。ちょうどサンゴの大規模な白化現象がおこった年だよ。ほら、栗生のサンゴなんか真っ白になったでしょう。夏場の水温なんか30度を越していたよね。」

「魚には自分が暮らしやすい水温があってね、それは自分のえさとなる魚がそこにいるかどうかということなんだけど。丁度その年の屋久島沿岸の高水温はサバにとっては快適とはいえなかったんだろうね。それで島の周辺ではサバが殆どいなくなってしまった。だからサバがさっぱり獲れなかったんだと思うよ。そうそう、その変わり、その年はモジャコとマダイが大漁だったなぁ」

水揚げ量が激減したのは海水温の上昇によるところが大きいらしい。「さっぱり獲れなかっ

上屋久町におけるサバ漁の移り変わり



た」というお話のとおり 97 年のサバの水揚げ量は約 7t。匹数に換算するとおよそ 7 千匹。その生産額はわずか 270 万円だ。

②屋久島の海を舞台として繰り広げられる人間模様の変化

以上のようにこの 10 年だけを見ると、サバ漁は、自然環境の影響を受け大きく変動するものだということがわかる。しかし 20 年前から比べて水揚げ量が半減しているのは自然環境の変化だけでは説明がつかない。

水揚げ量、価格ともに一気に下降しだした 96 年の 7 月 21 日。良く晴れた夏の日の出来事である。サバの水揚げ本拠地、一湊で毎年行われている年間行事の「港祭り」に合わせて、漁民挙げての「総決起大会」が行われた。なぜその様な集会が開かれたのか？その内容は屋久島の季刊誌「生命の島」に詳しい。以下文中より抜粋させて頂いた。

> 「快晴に恵まれた 7 月 21 日は、漁協事務所のある一湊漁港水揚げ場付近に人々が朝から集まり、漁師たちの力のこもったシュプレヒコールが湾内に響き渡った。
>
> ◆ 操業禁止区域内での違反操業をするな！
> ◆ 熊毛周辺海域の操業禁止区域を拡大せよ！
> ◆ 世界遺産の島は漁民の手で守ろう！
>
> 「操業禁止区域内での違反操業をするな！」「熊毛周辺海域の操業禁止区域を拡大せよ！」という主張は、実に過去 20 年間もの間叫ばれ続けてきた漁民自身の欲求だった。またこれは上屋久町漁民だけの言い分ではなく、屋久町漁民、はたまた隣の種子島漁民も含めた熊毛地区全体の漁民、漁業関係者の痛切な願いでもあった。」
>
> 以上「生命の島第 39 号」より

つまりよそからきた船が底引き網漁で魚を根こそぎかっさらっていってしまう‥という事実があるのだ。これに対し、屋久島、種子島の水産関係団体で組織する熊毛地区水産振興協議会は 1976 年以来、国と県に対して何度となく総決起大会で叫ばれた要望と陳情を繰り返してきたそうだ。

底引き網は魚種、魚の大小を一切問わず海の生物を一網打尽にする。沖合い底引き網の操業に対しては沿岸3海里（約 5.5km）の禁止区域と操業制限海域がある。その区域に外来船がやってきて魚を全て持っていってしまうのだ。この事実は屋久島のみならず熊毛海域に壊滅的な打撃を与えているのである。

食卓を気軽にサバが飾る日が来るのか？

さて、再び先のグラフを御覧頂きたい。全くと言っていいほどサバが獲れなかった 97 年を境にサバの生産量は再び増加し、それとともに生産額も上昇している。ここで面白いのが水揚げ量は 93～95 年に比べて少ないにも関わらず、99～01 年と生産額はむしろ増えているという点だ。

サバの kg あたりの単価を見ると（下のグラフ）、97 年を境に一気に上昇して、のち 1000 円前後を横ばいしていることがわかる。つまり 98 年以降、サバの水揚げが回復したにもかかわらず、なぜか単価が高値で安定しているので生産量の伸びよりも生産額の伸びが大きくなっているのだ。

「首折れサバ」は昔々から島の人々の食卓に上がる「大衆魚」として愛されてきた。ブランド化の努力のおかげか 97 年を境に単価が高値に安定した「首折れさば」。美味しいのはわかっていてもちょっと高くてなかなか手がでない。かつての良き時代の様に、気軽に食卓を飾る日は再び来るのだろうか？

夜のサバ漁が昼にチェンジ!?

さて、ここでサバ漁そのものの変化や船に乗る「のりこ」の数的変化に迫ってみたい。

今からおよそ 8 年～9 年位前までは夜にサバを獲っていた。夕方になると海へ出漁し、空が白茶けるまでサバを獲り、そして朝日が昇るのとともに港へ帰ってきた。しかし夜の漁で揚がるサバの数はだんだんと少なくなり、今度は昼間により多く揚がる様になったそうだ。なぜだかはわからない。それはサバのみぞ知る…!?夜の漁はサメも多いし様々な危険を伴う。昼間の明るい太陽の下、サバが獲れるのならば昼に漁に出た方が人間の体内リズム（朝日が昇ったら目を覚まし、星が瞬き始めたら眠りにつく）で仕事ができ、ずっと楽な上、リスクも少ない。

そして92～97年頃からサバ漁は夜の漁から昼の漁へとそのスタイルを 180 度方向転換することとなる。日の出とともに目を覚まし朝 7 時頃に出漁、そして夕方5時頃に港へ帰る‥そんな会社員的職場スタイルになった。しかし会社員と大きく違うのは収入が魚のとれ具合により大きく左右されるという事か。

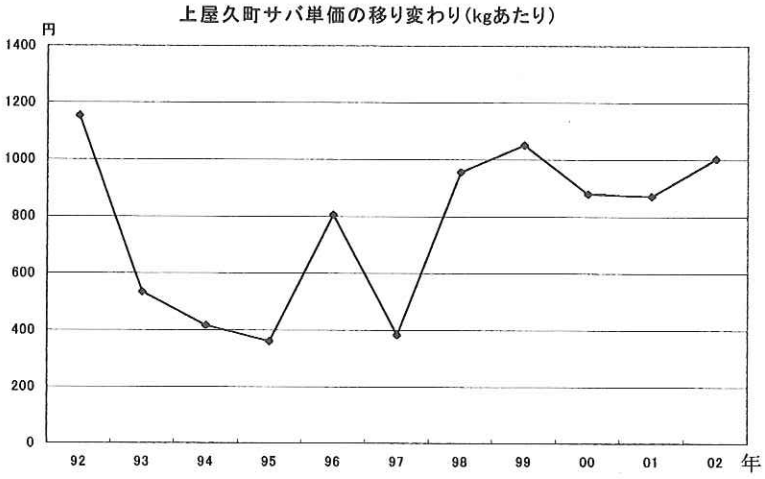
また、その漁法スタイルの変化とともに船に乗り込む「のりこ」の数も減少した。以前は1隻に10～20人近く乗り込んでいたが、今では1隻に1人または2人しか乗っていないという。サバ船の数も減ったそうだ。

昔に比べ船の機械化が進み人手が少なくても仕事ができるということはある。だがその裏には漁師の高齢化と共に後継者不足という深刻な事実があるようである。

おわりに

毎年7月20日の海の日に、サバ漁の本拠地、一湊では漁民あげての「港祭り」が行われる。かつては浜祭りと呼ばれ、海の神様である八幡様に豊漁を感謝し、航海の安全を祈願して、旧暦の6月3日に行われていた。港祭りでは地元の特産物が並び祭りの屋台も軒をつらねる。普段は魚が並ぶ漁港に、この日は演芸大会の舞台が作られる。その周囲にはゴザが並び漁民が座る。皆ご馳走と三岳を堪能しながら大いに湧きあがる。そしてなんといっても港祭りのハイライトは上屋久町の何隻もの漁船による海上パレードだ。ギラギラと照りつける太陽の下、華やかな大漁旗をいく枚もはためかせ、正装した漁船が一列になり真っ青な海の上を悠々と行進する姿は、思わず鳥肌が立つ程、猛々しく見惚れてしまう。その姿に「漁師ってかっこいい！」と素直に思う。

海の環境は時代とともに変化している。同時に島の漁業も刻々と変化している。けれど、「漁師達の心意気」は往く度の時代を経ても変わらずにいて欲しい…と思うのは私だけだろうか？



Calendar

２００３年

1/17～20 社員研修で宮崎県綾町へ。照葉樹林構築など。

1/26･27 市川、屋久杉自然館主催 垂直分布体験バスツアー講師。

2/2～5 松本、エコツーリズム大会実行委員会ｉｎ阿蘇出席。

2/4･6 小原・松本、屋久島高校環境コース授業講師。

2/6･7 環境文化研修センター主催ガイドセミナー参加。

2/19～27 小原・鷲尾、海外ツアー調査でタイ（ドイインタノン国立公園）へ。鷲尾はその後カンボジアのアンコールワットへ。

2/20～3/2 市川、第３回風の大空タスマニアツアー講師（藤村参加）

3/18･24 松本・高橋、栗生サンゴ調査。

3/20 イラク戦争始まる。

3/21～4/1 小原、台湾へ沢登り。SARS ぎりぎりセーフ。この後、香港、中国、台湾を中心にSARS 旋風が吹き荒れる。

3/26･27 市川、うどん屋資材買い付けで鹿児島へ。

3/29～4/2 読売新聞エコツアー体験旅行受け入れ。

3/31 持原退社。

4/5 松本・高橋、環境省グリーンワーカー事業オニヒトデ調査に参加。

4/7 小原風子(長女)・市川初夏(長女)屋久島高校入学。

4/20 自然クラブ2003 第１回明星岳参り。

4/25･26 松本・高橋、ダイビングメディカルチェック研修会in 福岡に参加。飲酒の恐ろしさに目覚めるも、喫煙はやめず。

4/20 松本・高橋、観光協会"海開き"港清掃と体験ダイビング講師。

5/8 なみはや高校修学旅行受入。

5/9～18 松本・高橋、宮内庁生物学御研究所のハゼ調査に同行。

5/11 自然クラブ2003 第２回 吉田岳。

5/28～31 松本、環境自治体会議でエコツーリズム分科会で事例発表。全国で講演をしている松本も屋久島でエコツアーリズムについてしゃべるのはこれが初めて。他のYNAC メンバーも分科会参加。

5/31 ピッキオ・南氏、JTB 財団・寺崎氏らと西部林道で交流会。

6/1 松本・鷲尾、NPO 法人うみがめ館主催いなか浜清掃作業に参加。

6/7 自然クラブ2003 第３回 羽神岳登山

6/8～14 藤村、知床自然センターで自主研修。

6/15 山の神祭り。ガイ連協総会。

Library

執筆記事

★ 世界遺産屋久島 多様性の回廊」 水越武写真集 2003.5 p133 ～145「屋久島の自然を楽しむ」(小原)

水越武さんの写真集の付録に自然ガイド文を書かせていただいた。このような機会を与えられるとは、願ってもない名誉なことだった。しかしやはり舌足らずな箇所の多い自分の担当部分には冷や汗をかく思い。何点かの作品では、私も撮影の現場に同行するという幸運に恵まれ、懐かしくも強い印象が残っている。

★ フィールドトレック屋久島 山と渓谷社 2003.6.12(鷲尾)

「YNAC通信の調子で書いて下さい。」と思いがけない原稿依頼がきた。「私が大好きな屋久島」と題して、エコツアーの魅力をえらそうに書いてみました。ただいま好評発売中！松本も愛子岳等書いてます。

Contents

巻頭言	YNAC10 年の歩み	1
寄稿	YNAC10 周年に寄せて	4
年表	YNAC10 年史	6
集大成	屋久島の渓谷ダイジェスト	11
つれづれエッセイ	YNAC5年生	16
10 周年企画	屋久島ガイドブックの 10 年	18
	おしりにやさしいもの 10 選	20
	ヤクサバの 10 年	22

★「うきうき辞典」2003.3 うきうき研究会自主出版（高橋）

浮きについての熱い思いが込められた百科辞典?的うきうきバイブル。その中で屋久島の漂着物事情について担当。

掲載記事

★ BE—PAL 2003.3（松本･市川･小原･藤村）

・ヤクスギランド～三穂野杉コース

・西部林道マウンテンバイクコース等の紹介

編集後記

■ 10 年一昔といいますが、確かに色々ありました。10 年前は若かったなぁ。今度は20 周年を目指して頑張ります。（ま）

■ 奇妙なはやり病のおかげで、熱帯行きの計画がうまくいかなくなっているが、こんなことではめげないぞ。進路は南なのだ。発酵食品好きだしね。(お)

■ 思い返せばこの4年間で経験したことや出会った人々がいかに多いことか。これからも素敵な経験、出会いが出来ますように…。(さ)

■ 口永良部の魚たちに別れを告げて早3年。そろそろ屋久島でも魚友達を作ろうかな…。(あ)

■ 先日サンゴの調査に参加する機会があった。魚の様には動き回らないサンゴ達は一見動物であることを忘れてしまいそうだが、その調査でサンゴの生態やその種類が実に多岐にわたることを学び、改めてサンゴも生きてるんだなぁ！と感動した。海にはまだまだ私が知らないたくさんの宝箱が眠っている様だ！ワクワク★(ひ)

■ 10年前･･･あの頃の私は短大生。「飛行機と旅が好きだから、将来はスチュワーデス」なんて思っていたのに･･･。綺麗なお姉さんになる予定が、元気なねーちゃんになってました。毎日楽しいからこれでいいんです。(わ)

■ この10年屋久島そのものが大きく変化した10年であったようにも思う。10 年前に聞かれた島民の不満と現在のそれとは変化しているが、不満がなくなるということはない。来るべき 10 年は、島の暮らしの中で、一人一人の幸福度UP とは何かを考えていきたい。（い）

ＹＮＡＣ通信 NO.17 10 周年記念特別号

発行日：２００３年７月１日

発行：㈲屋久島野外活動総合センター

住所：〒891-4205 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦368-21

TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-0945

E-mail : forest@ynac.com URL : http://www.ynac.com/